hyphen
no. 8

【年次報告】
伊藤　幸生　一般的観点と出来事論―ともに考える、ひとりで考える―DG-Lab の８年間.....1

【論考】
山森　裕毅　フェリックス・ガタリにおけるイェルムスレウ言語理論の理由と展開.....4
瀧口　隆　ドゥルーズ『シネマ』における視覚的イメージの読解について.....12
尾谷　奎輔　「存立性（consistance）」概念について―フェリックス・ガタリにおける機械の問題―...21

8 October 2023, Deleuze-Guattari Laboratory

hyphen
no. 8

【Annual Report】

Yukio ITO — The general point of view and the event－Thinking with someone, thinking alone－DG-Lab, eight years gone.....1

【Articles】

Yuki YAMAMORI — Reason and unfolding of Hjelmslef's theory of language in Félix Guattari..4

Takashi TAKIGUCHI — Literality of visual image in Deleuze's *Cinema2* 12

Keisuke OTANI — On the Concept of "Consistency"
—The Problem of Machine in Félix Guattari.....21

8 October 2023, Deleuze-Guattari Laboratory

【年次報告】

一般的観点と出来事論―ともに考える、ひとりで考える―DG-Lab の８年間

伊藤　幸生

この会報『hyphen』2023 年度版での、「年次報告」は、やや旧聞に属する事とはなりますが、昨年 2022 年度に関するものになります。2022 年、DG-Lab は活動８年目を迎えました。今、この DG-Lab の特徴をひとつ挙げるとすれば、それは、大学院生や研究職の人々と学外の人々とが、ほぼ８：２の比率で入り混じった読書会、そして研究会であるというものです。大学外の組織ではありますが、大学に関係する二、三十代の参加者が多く、その瑞々しい知的欲求と一定以上の知的水準に支えられているという面が強い、広く開かれた集まりです。そのような中、今年の「年次報告」の筆者である伊藤は、大学や学会などとはかかわりがなく、そうした者として、在野でドゥルーズを読む多くの人たちに向けても、この年次報告を書いてみたいと思います。

社会学者の酒井隆史氏が、ドゥルーズについて次のように述べたことがあります。「「器官なき身体」や「ピンクパンサーになれ」とかグッとくるフレーズがたくさんあるけど、それ以上理解しようとすると、知的な含意が無茶苦茶広いし深いじゃない。」（『ドゥルーズ没後 10 年　入門のために』、71 頁）。

1965 年生まれの酒井氏にとって、1983 年の『構造と力』に始まる浅田彰氏によるドゥルーズ紹介がおそらく初めてのドゥルーズ体験だったのではないかと思われます。浅田氏による解説は、速度や強度、スキゾ分析、また、資本主義分析などの明快なドゥルーズ像を描き出したものでした。ところがその後、1986 年の『アンチ・オイディプス』をはじめとして主著が翻訳されていくなかで、思われていたよりもはるかに文章は込み入り、内容は西洋の知的伝統に深く根ざし、また、参照される分野は途方もないということが明らかになっていきました。

1980～90 年代に限らず、ドゥルーズを読む多くの人々にとって、酒井氏の実感は痛切なものとして感じられるものではないでしょうか。私たちはたとえば『襞』にも『シネマ』にも、酒井氏の言うような、「グッとくるフレーズ」をいくつも見出すことができます。しかし、ひとりで読んでいては相当な時間をかけても何が述べられているのか見えてこない箇所があるのも避けることのできない事実ではないでしょうか。

國分功一郎氏は、その博士論文の指導教員であった森山工氏に「國分さんはスピノザをひとりで読んでいる」と何度も指摘され、このことは結局乗り越えられなかったと述べます。そして、「本書の結論はいつの間にかこの指摘への応答になっていた。だが、自分ではなおも「ひとりで読んでいる」とはどういうことなのか、また、「誰かと一緒に考える」とはどういうことなのかわかっていない。私はおそらくそこに到達しなければならない。」と書きます（『スピノザの方法』、あとがき、358 頁）。

この國分氏の逡巡と決意からは、大学という場所がどういうものかがうかがわれます。「ともに考える」ということには、過去や同時代の書物の著者との対話という意味があるとしても、なによりも具体的な生きた人同士の日常的なかかわりの有無こそが問題になると思われます。大学とは、たとえば、デリダの使った avec という前置詞ひとつに、１年かけてその解釈を話し合い続けるというような具体的な対話に支えられながら考えることが、日常的に保証されるような場所です（デリダ読解の挿話については、芦田宏直、『シラバス論　大学の時代と時間、あるいは〈知識〉の死と再生について』、344 頁をご参照ください）。

森山氏の指摘と國分氏の問いとをもしアカデミズム的なものとするならば、いわば在野的なものとして、「ひとりで読む」ということを徹底したかのような人をひとり挙げてみたいと思います。その人は故吉本隆明です。吉本については、「在野の知の巨人」などというキャッチフレーズがメディアでよく使われていましたが、誰もがつい口にしてしまいそうなこの言葉には一度立ち止まってみる必要があると思われます。その、「在野の」という部分に込められた人々の情念の意味はやはり重いでしょう。在野、大学の外、ということは組織だった知的なつながりの乏しい場所だということです。働き、子を産み育て……などの生活に知的な交流などというものは、日常的には期待できないものです。

吉本が広く読まれたのは、彼が、大学という知的組織のない場所で、まるで「ひとりで読み、考え、書いている」ようだったか

らではないかと思われます。「マチウ書試論」、『源実朝』、『悲劇の解読』などのもつ迫力はまさにひとりで読み、考え、書いているかのような孤独という印象を残します。「吉本さんには他者がいないんですよ」と、ある批評家が語ったことがありました。実際の吉本の生活がどうだったのかは別のこととして、吉本が書いたものから逆算すると、「ひとりで読み、考えている、他者がいない」という表現がなにかを言い当てていると思われるのです。

ここで少し話をドゥルーズの思想につなげてみます。他者が欠けた世界にドゥルーズが肯定的なものを見出していたことは広く知られていることと思います。そうした思想の中核的論文である「ミシェル・トゥルニエと他者なき世界」に、「他者は類似と隣接の潤滑剤（douceur なめらかさ、なめらかにするもの）である。」という一節があります（※）。この「類似」、「隣接」という言葉はヒュームに由来するものと思われます。想像という働きが諸観念を相互に結びつける際に、原理（連合原理）として想像にもたらされるもののことですが、ここでは「潤滑剤」という言葉に着目してみます。（※國分功一郎氏は、この一節につき、ドゥルーズは、他者こそが連合原理の発生源だとしていると述べます。『ドゥルーズの哲学原理』、58 頁。）

具体的に考えると、「潤滑剤」という言葉からは、他者というものの現前や存在が量的なものとして、度合としてあるものと読めます。まったく他者が欠ける世界、ほとんど欠ける世界など、様々な度合を考えることができます。「他者」とは、知覚的な場の総体を機能させる構造とされ、可能的なものの構造とも言いかえられます。他者は可能な世界を表現する。私が知覚する各対象や私が思考する各観念の周囲に、ありうる世界という余白や背景を組織します。ところが、具体的な他者なき無人島で知覚的な場の構造の崩壊にみまわれたロビンソンは、「意識が事物に内在する燐光になる」などの新たな、強烈な世界と出会うことになるのでした。

このトゥルニエ論は、『意味の論理学』に「付録」として収録されたものですが、本文と付録とがまさに相手の中で響き合うかのように、『意味の論理学』の本文で、他者の存在の度合がきわめて低い人物、あたかもひとりで世界を知覚し、ひとりで考えたかのような人物として、ジョー・ブスケが書かれていたのではないでしょうか。自らの傷について、ブスケはひとりで考え抜いた。傷という偶発事 accident を前にして、「不幸」という事態の中で、他者が自ずと消えたのではないでしょうか。ごく日常的に考えて、不幸な偶発事はひとをひとりで考えさせます。ひとは時に不幸について突飛な解釈や意味づけをしてしまいます。では、ブスケはどうだったのでしょうか。潤滑剤としての他者があたかも消えたかのようになった、言いかえると、ありうる事実や観念の結合というものを他者がもはや表現しえないかのような世界が訪れた。それゆえにブスケは、傷という事実を受けて、ドゥルーズをして「これ以上の言葉はない」と書かずにはいられないようにした、途方もない言葉を言うことができた。他者とともに考えていてはとても思いつかないような事柄に思い至ったのでした。

他者とともに考える、ということは時にありふれた考えにいきつきます。このことにつき、一度ドゥルーズはその肯定的な側面を徹底して考えました。『経験論と主体性』において、特定の情念や利害などに囚われた現働的なあり方を逃れさせるものとしてドゥルーズが肯定的に取り上げたヒュームの「一般的観点」は、『哲学とは何か』におけるオピニオンと同様に一般論の世界です。トゥルニエ論では、「連合原理」や「可能的なものの様相」などの、『経験論と主体性』で問題にされていた事柄が、他者との関係で述べられ、明示されてはいませんが、同書が他者論として位置付けられたうえで、他者が欠ける世界が肯定されたのでした。

『経験論と主体性』と『意味の論理学』とをひとつの問題が貫いています。それは、「事情」や「偶発事」のもと、特定の現働的な状態に閉じ込められた主体がどう生きるか、というものです。『経験論と主体性』では、特定の現働的状態からの脱出を可能にする想像力の働きを核として、ヒュームの「一般規則」や「一般的観点」に依りながら、問題が展開されました（なお、同書でも、宗教論で、「不幸」が他者のいない世界に通じるかのような記述が見られます）。この「現働的状態をどう生きるか」という問題が『意味の論理学』へと引き継がれ、出来事論として結実したのでした。「ヒュームからブスケへ」というドゥルーズの思想の転換があったと読むことができます。一般的観点から出来事論へ。

ブスケは広い交友関係のある人であったと言われ、そうした実際の生活が傷について思いめぐらせることに寄与したとももちろん考えられます。しかしブスケの言葉は、ひとりで考え抜いた人のものであるというほかないというふうに感じられ、迫ってくるものです。ひとりで読む、考えるということには何らかの大きな意味があることはまちがいなさそうですが、吉本隆明にしても、ジョー・ブスケにしても、ひとりでにそうあらざるをえなかった、ということが真実でしょう。そして Lab としては、事情が許す限り、ともに読むという欲求や願いに従っていきたいと思います。

昨年の DG-Lab の読書会の年間計画は、『アンチ・オイディプス』でした。『アンチ・オイディプス』のような、まさしく酒井氏のいう「グッとくるフレーズがたくさんあるけど、それ以上理解しようとすると知的な含意が無茶苦茶広いし深い」本をともに読む機会があったということから、そして DG-Lab の 8 年間の活動の累積から得られた体感にもとづいて思い至った幾つかの言葉について、本稿では書いてみました。

2022 年活動記録

第 42 回　DG-Lab 研究会

【日時】2022 年 1 月 22 日（土）14:00-17:30

【使用アプリ】Zoom

【読書会】ジル・ドゥルーズ＋フェリックス・ガタリ『アンチ・オイディプス』第 1 章（進行：内藤慧）

第 43 回　DG-Lab 研究会

【日時】2022 年 3 月 5 日（土）14:00-17:30

【使用アプリ】Zoom

【読書会】ジル・ドゥルーズ＋フェリックス・ガタリ『アンチ・オイディプス』第 1 章、第 5 節、第 6 節（進行：内藤慧）

【研究発表】F・アツミ（Art-Phil）「ドゥルーズ・ガタリの歴史とパブリック・ヒストリーへの問い：出来事、アジャンスマン、生成の視点から

第 44 回　DG-Lab 研究会

【日時】2022 年 5 月 28 日（土）14:00-18:30

【使用アプリ】Zoom

【読書会】ジル・ドゥルーズ＋フェリックス・ガタリ『アンチ・オイディプス』第 2 章、第 3 節～第 5 節（進行：平田公威）

【研究発表】得能想平「問題としての理念――ドゥルーズのカント解釈を参考にして」

第 45 回　DG-Lab 研究会

【日時】2022 年 8 月 27 日（土）14:00-17:30

【使用アプリ】Zoom

【読書会】ジル・ドゥルーズ＋フェリックス・ガタリ『アンチ・オイディプス』第 3 章、第 1 節～第 7 節（進行：西川耕平）

第 46 回　DG-Lab 研究会

【日時】2022 年 9 月 28 日（土）14:00-17:30

【使用アプリ】Zoom

【読書会】フェリックス・ガタリ＋フェリックス・ガタリ『アンチ・オイディプス』第 3 章、第 8 節～第 11 節（進行：西川耕平）

【研究発表】尾谷奎輔「ガタリのダイアグラム的欲動」

第 47 回　DG-Lab 研究会

【日時】2022 年 11 月 19 日（土）14:00-17:30

【使用アプリ】Zoom

【読書会】ジル・ドゥルーズ++フェリックス・ガタリ『アンチ・オイディプス』第 4 章、第 1 節～第 3 節（進行：有馬景一郎）

【研究発表】内藤慧「ドゥルーズの「管理社会」論」

【論考】

フェリックス・ガタリにおけるイェルムスレウ言語理論の理由と展開

山森　裕毅（滴塾　第二学舎）

はじめに

哲学者ジル・ドゥルーズと精神分析家フェリックス・ガタリは共著である『千のプラトー』のなかで言語学者ルイ・イェルムスレウを「スピノザ主義地質学者」(1) と評した。ドゥルーズがスピノザの哲学を高く評価し、自身の思想形成への強い影響を隠さなかったため、それと連動する形でドゥルーズ研究の文脈でイェルムスレウへの関心や評価も高まった。ドゥルーズの難解な思想をより深く理解するうえでイェルムスレウは重要な思想家のひとりである。

はたしてこの認識は正しいだろうか。あるいは正しいとして、それでも『千のプラトー』におけるイェルムスレウ論はドゥルーズの名において汲み尽くせるものだろうか。というのも、共著者のガタリもまた自身の思想形成にイェルムスレウの言語理論を必要としていたからである。文献上の事実としては、イェルムスレウへの言及はガタリのほうが圧倒的に多い。また証明は難しいが、最初にイェルムスレウとスピノザのあいだに思想上の共通点を見出したのはドゥルーズではなくガタリだった可能性もある(2)。それほどまでにガタリにはイェルムスレウを必要とする思想上の理由があり、その展開がある。

その発端はラカンの精神分析への批判をめぐるものである。この批判はやがて「ダイアグラム」を軸とするガタリ独自の記号論の構築へと進展していくのだが、イェルムスレウの言語理論はその一連の議論の基盤をなすものとなる。では、その一連の議論とは具体的にどのようなものだろうか。本稿は主に『アンチ・オイディプス草稿』（以下『草稿』と略記）と『分子革命』の二冊を通して、ガタリのイェルムスレウ論の理路とその展開を相当に簡略化して辿るものである(3)。この理路を端的にまとめれば「シニフィアン発―地層経由―ダイアグラム行き」と表すことができる。ただし注意が必要なのは、この行程は時系列的なものではなく、理論的かつ実践的な順序だということである。

1. シニフィアン発、あるいは争点としての「記号」

ガタリは 1950 年代からラカンのセミネールに出席しており、62 年に彼から教育分析を受けはじめて 60 年代の後半（69 年か？）に精神分析家になったという経緯がある。そしてその過程のなかでラカン派精神分析への理論的な批判を抱くようになっていった。

その批判が明確に形にされたのが 1972 年の『アンチ・オイディプス』（ドゥルーズとの共著）である。このなかにイェルムスレウの言語理論が短く参照されるのだが、それはラカン派精神分析にとって基本的な概念であるシニフィアンとシニフィエを、イェルムスレウの提案した概念「表現」と「内容」によって乗り越えることができると説く場面である。この議論についての理論的な説明は後回しにして、まずここで確認しておくべきことは、ガタリが対精神分析戦略として言語を含めた「記号」を争点に選んだということである。

この争点が最初に現れるのは 66 年の論稿「記号から記号へ」である。これはガタリが 61 年にラカンに宛てて直接手紙で伝えたものを再構成したものとされる。インクの染みについての記述からはじまり、点のような記号がどのようにしてシニフィアンになるのかについて論じている。しかし難解な部分があまりに多く、その論旨を精確に読み取ることはできない。このことから、この時期ガタリはまだ自分の考えを表明するための言葉を持っていなかったと考えられる。その後、彼は『草稿』でこの論稿について振り返っているのだが、そこで登場するのがイェルムスレウである。

どういうことかといえば、染みや点を用いてガタリが論じたかったのは、まさにイェルムスレウのいう「記号素＝形象」(figur, figure)のことだったというのである（記号素＝形象とは「記号の構成部分として記号体系のなかに入る（…）非記号」(4) であり、ガタリはこれを「シニフィエの外部にある（…）下-意味的［infra-sens］な素材」(5) のことと理解する。ちなみにイェルムスレウが「記号」という場合、おおよそ「言語」のことを指しているが、ガタリはこれを言語に限定されない記号にまで拡張して使いたいと考えている）。こうしてガタリはイェルムスレウの言語理論と結びついていくことになる。

2. イェルムスレウの理由：『草稿』

2-1. ガタリの前提

『草稿』が 2005 年に公刊されたことによって、精神分析と記号論の関連について非常に多くの、しかし錯綜した記述を読むことができるようになった。『アンチ・オイディプス』での言及の短さは何だったのかと思うほど、イェルムスレウの名は『草稿』のなかで繰り返し登場する。では、それは何のために／どのような仕方でだろうか。

すでに述べたようにそれはラカン（派）の精神分析を批判するためであるが、ここではもう少し深く踏み込んでみよう。ガタリは精神分析のトレーニングや精神を病んだ（特にスキゾフレニーの）人々との交流を通して次のような理解に至った。「無意識は〈言語のように構造化されて〉はいない」[6]。これはラカンの有名なテーゼのひとつ「無意識は言語のように構造化されている」を真っ向から否定するものであるが、ガタリは自身の考えを展開するための理論的な道具をイェルムスレウの言語理論に求めたのである。

後者の無意識をここでは「言語としての無意識」と呼ぼう。この無意識に対するガタリの論点を三つにまとめることができる。ひとつは意味作用(signification)をめぐるものである。ガタリにとっての意味作用とは、記号の表示面であるシニフィアンと記号の内容面であるシニフィエが一対一対応することでその効果として「意味」を生じさせる作用ということができる。とりわけガタリはシニフィアンに優位性があると考え、その対応関係をシニフィアンがシニフィエを従属させる関係と見なす（ガタリが「シニフィアンの専制」や「シニフィアンの帝国主義」と呼ぶ事象）。

二つ目は象徴をめぐるものである。象徴とはシニフィアンとシニフィエの対応関係が類似でも因果でもなく、人為的なものであるような記号のことであり、だからこそシニフィアンがどのようなシニフィエに結びついているのかを「解釈」する契機が生まれる。精神分析ではこの解釈の作業においてオイディプス神話を基にした解釈格子を用いるが、ガタリはこれを還元主義的で無意識の分析には適さないものとして、また罪責性を背負う個人を生み出す操作として批判する（個人を生み出すとは、ガタリにとっては資本主義の末端で隷属させられる近代的主体を生み出すことをも意味し、そのため精神分析は資本主義の装置として捉えられることになる）。

三つめは主体をめぐるものである。ラカン派精神分析の場合「無意識の主体」というものが重視されるが、ガタリがこだわるのはそれではなく「言表行為の主体」である。ガタリは言表行為の主体なるものは存在せず、言表行為の集合的なエージェント（代行者）がいるのだと主張する。そして後者はガタリの主要概念である「言表行為の集合的アジャンスマン」へと展開していく。

ガタリは、言語としての無意識を構成する上記の特徴（意味作用、象徴とその解釈、言表行為の主体）が人を社会に従属させるように機能すると考える[7]。ガタリがイェルムスレウを必要とする理由は、まさに彼の言語理論が言語としての無意識を批判するポテンシャルを秘めていると考えるからである。

しかし一見すると奇妙なことである。ラカンの精神分析はフロイトやハイデガーの言語観とソシュールやヤコブソンの構造主義言語学とが混じり合って作られているが、イェルムスレウはそのソシュールの最大の後継者と評される言語学者である。とすれば、ソシュールの延長線上にイェルムスレウはいるのであって、むしろ精神分析を批判するよりも強化するほうに適しているのではないか。これに対するガタリの基本的な考え方が『分子革命』に所収の論稿に示されている。「私が思うに、言語学者たちはイェルムスレウによる表現と内容のあいだの区別と、ソシュールによるシニフィアンとシニフィエのあいだの区別とを性急に同一視したのである。」[8]。

では、実際にガタリはイェルムスレウの言語理論の何を／どのように使って言語としての無意識を批判していくのだろうか。この点について『草稿』から掘り下げてみよう。

2-2. 形象

ガタリが『草稿』のなかで扱うイェルムスレウの概念でまず取り上げたいのは「記号素＝形象」である。これは先にも触れた通り記号の素になる非記号（素材）を意味する概念だが、ガタリはこれを「その素材が形象である記号」[9] と独自に捉え「形象-記号」と表記する。彼はこれに「（無意味とは異なる）非-意味であり（…）意味作用の外部で作動する」[10] という機能を認める。これはシニフィアンに還元することのできない機能である[11]。

ところがガタリは、せっかく切り分けた形象-記号とシニフィアンを同列に並べて論じたり、形象-記号に個人化（対象の身体化や実体化など）の機能を認めたりするなど、その理解には揺らぎがあるように見える。これをどう考えればよいのか。次の引用から考えるなら、ガタリは形象-記号をシニフィアンでもありシニフィアンを逃れるものでもあるという両面性を備えたものとして捉えていたと考えることができるだろう。

> だから形象-記号を悪いものだと早急に判断しないことだ。もしそれがシニフィアンのエージェントだとしても（…）、それは革命的な道もまた開くのである、生産的な無-意味の分裂-倒錯的な道を。[12]

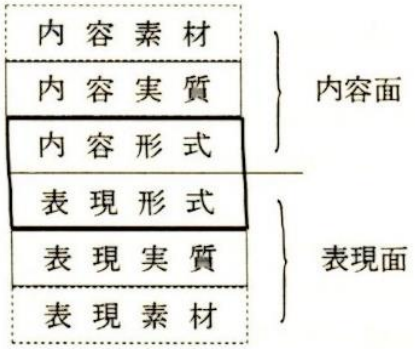
形象の議論はいったんここまでにして、イェルムスレウの別の概念に移ろう。それは「表現」と「内容」、次いで「形式」と「実質」と「素材」といった概念群である。これら概念群によって記号の「地層」というひとつのヴィジョンが描かれる。

2-3. 表現と内容、形式と実質、地層

順を追って見ていこう。まず「表現」と「内容」とは、記号の表現面と内容面を表すものである。これらが言語学者らによってシニフィアンとシニフィエにそのまま重ねられるのはわからないことではないし、実際イェルムスレウも言語学者としてある程度そう考えていたと思われる。これに対してガタリは次の差異を重視する。ひとつは、シニフィアンがシニフィエを従属させる関係であるのに対して、表現と内容の場合は相互依存関係（連帯関係）であるということ。ここでいう相互依存とは、表現が内容の表現であり、内容が表現の内容であるというような、双方が他方を前提しなければ成立しない関係のことである。ガタリはここにシニフィアンの専制の解消を見出そうとしているように思われる。

次にガタリは、イェルムスレウのいう表現には音韻や音声、文字など言語にかかわるものだけでなく、身振りや形象、イコン、ダイアグラムなどの非言語的な表現も含められると考える（イコンとダイアグラムはガタリが参照するもう一人の重要人物チャールズ・サンダース・パースに由来する概念）。しかし、精神分析がシニフィアンに非言語的な象徴も含むことを考えれば、表現に非言語的なものを含むというだけではシニフィアン批判にはならない。とすればおそらくこういうことだろう。精神分析のシニフィアンが言語優位で、非言語的なものもやがて言語に還元される傾向が強いのに対して、ガタリの考える表現は非言語的表現に重きが置かれている。それは究極的にはダイアグラムに向かうのであり、それによって無意識は言語としての無意識を超えて「ダイアグラム的無意識」に至るというのがガタリの主張である。

続いて「形式」、「実質」、「素材」について触れておこう。これらは表現と内容を分析することで析出される記号機能の区分であり、表現の形式／表現の実質／表現の素材、そして内容の形式／内容の実質／内容の素材となる。『記号学小辞典』での図 (13) を参照すれば次のようになり、これを「地層」と形容する。



イェルムスレウによれば「素材」は、内容の場合は無定形な思考の塊を意味し、表現の場合は無定形な音声領域の連続体を意味する。どちらにせよ未分化な連続体のことであり、「原意」(mening)と呼ばれることもある。「形式」とは体系的に形成された分節であり、これが素材を切り分ける。そして形式によって切り分けられた素材が「実質」に当たる。

『草稿』においてガタリの素材への関心はそれほど強くなく（素材と実質を混同するかのように）実質を純粋な連続体（物質流）と見なし、また形式を「コード」と読み替えて議論を進める。そしてイェルムスレウが実質を軽視し、形式を重んじたこと (14) を高く評価して、ガタリ自身のコード論を補強するために彼の言語理論を用いていく。説明が複雑になるためここでは深く踏み込まないが、このコード論が「コードの剰余価値」や「コード拡張」、「共立平面」といった議論とともにダイアグラム論へとつながっていくことになる（雀蜂と蘭の婚姻の例 (15)）。この先の議論と関連してここで注目しておくべきことは、この時点でガタリはダイアグラムをコード、つまり形式の枠内で捉えていたということである。

以上、『草稿』からかなり手荒く圧縮してガタリの議論を追ってきたが、この時期にすでに「シニフィアン発―地層経由―ダイアグラム行き」の理論的-実践的順序が出来上がっていることがわかる。イェルムスレウの言語理論はこの順序のなかでシニフィアンからダイアグラムへの移行をつなぐ重要な役割を果たしているといえるだろう。

3. イェルムスレウの展開：『分子革命』

3-1. 権力と恣意性

『草稿』にはガタリのイェルムスレウ論のほとんどのアイデアが出揃っていたといえる。それは爆発的といえるほどの勢いと量である。しかし、決して体系的な完成度が高かったわけではなく、萌芽状態だったものも多い。そして時を経るなかで整理が進み、評価が変わったものや消えていったもの、そして練り上げられていったものもある。1977 年に公刊された『分子革命』はそのようなガタリの試行錯誤が非常によくわかる論集であり、イェルム

スレウへの言及も多い。ここからは『草稿』以後のイェルムスレウ論の展開を『分子革命』から辿ってみよう。

『分子革命』において明確に前景に出てくる議論のひとつは「権力」と「政治」である。これらは『草稿』においてはまだうまく記号論と接合しきれていなかったが、『アンチ・オイディプス』を経て『分子革命』に至るなかではっきりと接合されることになる。では記号と権力はどのように関連するのか。ガタリの考えを三つ列挙しておこう。

> 権力は意味作用の記号学［sémiologies de la signification］にもたれかかることでしか自身を維持できない。つまり「いかなる者も法を知らないとは見なされない」というが、これはいかなる者も語の意味を知らないとは見なされないということを前提としているのである。(16)

> 意味は、（…）まぎれもなく実在し正確に特定できる社会的権力構成体[formations de pouvoir social]によって調整されている。（…）意味作用を捉えることは常に権力を握ることと不可分である。(17)

> ある欲望にかんして「それは何を意味しているのか」という問いが出されるたびに、ごまかされてはならないことがある。つまり、ひとつの権力構成体が介入しつつあって、説明を求めに来ているのである。(18)

これらの引用からわかるのは、権力と意味作用とが連動しており、権力構成体は意味を司ることができる、ということである。こうした考えが「言語としての無意識」にも絡んでくることになる。ガタリがこう述べている。

> 「無意識は言語のように構造化されている」とラカンは私たちにいう。もちろんそうだ！しかし、誰によってそうなのか。家族によって、学校によって、兵舎によって、工場によって、映画によって、そして特殊な事例においては精神医学や精神分析によってである。(19)

無意識はその本性として言語のように構造化されているのではなく、権力構成体（家族、学校、精神分析など）との関係においてそうなるというのがガタリの考えである。このような議論を通して彼はイェルムスレウ論の展開において重要な見解に至る。

> 意味を生じさせる結合の操作の恣意性は、言語学者たちがシニフィアンとシニフィエと呼ぶもののあいだに彼らが描き出すものなのだが、実際のところ政治的な恣意性である。(20)

シニフィアンとシニフィエの結合の恣意性に政治や権力構成体の介入を見出すのはガタリ独自の見解といえる。そしてまさにここが闘争＝逃走の場所となる。それだけでなく、シニフィアン-シニフィエが権力の介入する地点だとして、では表現-内容の連帯関係についてはどうなのかも問わなければならない。はたして表現-内容は政治や権力とどのようにかかわるのだろうか。

3-2. 形象から非シニフィアン的記号論へ

「形象」から見ていこう。というのも『草稿』においては形象がシニフィアンに属しつつも、意味作用を逃れて別の仕方で作動するものとして描かれていたからである。『分子革命』ではどうだろうか。ここでは形象はどちらかといえばネガティブな側面で使われることが増え、また短く言及されるのみで議論が深められるということはない。端的にいえば存在感を失って後景に退いたといえる。

それに代わるように前景に出てくるのが「非シニフィアン的記号論」(sémiotiques a-signifiantes)というものである。これを厳密に捉えるのは難しいが、形象が記号（＝シニフィアン）の素になる非記号であり下-意味的な素材であると規定されていたのに対して、非シニフィアン的記号論は記号（＝シニフィアン）の素にはならない非記号であり、無意味な（意味作用から外れた）素材、しかし科学的あるいは芸術（特に音楽）的に形成された素材であると規定される。いわば形象よりもさらに意味作用から距離を取った記号論、もっといえば意味作用から「世界を逃がす」(21) 記号論をガタリは構想していくのである。

非シニフィアン的記号論はガタリの記号論において核心をなすものであるが、本稿の性質上この概念にこれ以上深く踏み込むことはしない。ここではこの記号論がイェルムスレウの言語理論とどう関連するかを追う。すると見えてくるのは『草稿』では焦点の当たることの少なかった「素材」という概念であり、さらにいえば「表現の素材」という概念である。

3-3. 素材と映画

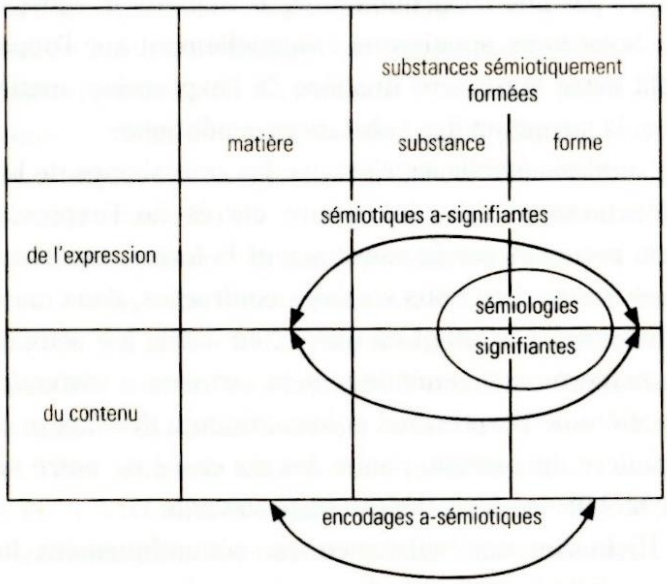
素材とは何か。すでに触れたように、それは（内容であれ表現であれ）記号の形式がそこから実質を切り出してくるところのものである(22)。イェルムスレウ自身は言語学が扱うのは主に表現の形式と内容の形式であるとして、素材そのものに対してそれほど関心を向けていないように思われる。それを受けてか、ガタリ自身も『草稿』では素材についての言及がないわけではないもの

の、形式（＝スピノザの「様態」＝コード）の創造性に重点を置いた考察を多く残していた。

しかし、非シニフィアン的記号論という考えが前景化してくるのと連動して素材についての言及が増えてくる。このことについてガタリは簡潔に次のように述べている。

> 実際、記号的に形成されていない素材と記号的に形成された実質との区別は、その区別が表現と内容の関係から独立して設けられるかぎりで、シニフィアンの記号学(sémiologies)から独立した記号論(sémiotiques)、すなわちまさにシニフィアン-シニフィエという二極性のうえに築かれるのではない記号論の研究への道を開くのである。[23]

つまり、形式（および実質）の観点に留まるかぎり意味作用の記号学の枠内から出ることができないとガタリは考え、その脱出路として素材に着目したと考えられる。ガタリはこの考えをイェルムスレウの地層を用いて次のように表している[24]。



この表によってシニフィアン（意味作用）の記号学と非シニフィアン的記号論の関係性を捉えることができるようになる。要するに前者が権力構成体が意味を司る領域を表しており、後者が権力構成体が意味を司る領域の外部を表しているといえる。するとここまでの議論から、ガタリは素材を〈意味作用から世界を逃がす橋渡し的な機能を担うもの〉として捉えていると考えてよいだろう。ここで、イェルムスレウではなくガタリにとっての素材についてもう少し踏み込んでおこう。

ガタリの素材論が比較的わかりやすく論じられているのは『分子革命』に収められている彼の映画論である。このなかでもガタリは、映画の意味作用として機能する側面とそれを逃れる非シニフィアン的記号論の側面を対比的に論じている。そこで内容の素材と表現の素材の関係について、映画記号学者クリスチャン・メッツを参照しつつ次のように述べている。

> 非シニフィアン的記号論としての映画は、どうやってシニフィアンの記号学の枠を越え出るのだろうか。クリスチャン・メッツは私がやるよりもうまくそれを説明している。彼が教えてくれるのは、映画は分野が限定されて専門化した言語ではなくて、その内容の素材には限定がないということである。（…）映画の内容の素材は、その表現の素材を構成する記号論的混合物がそれ自体で外部の多種多様な強度のシステムに開かれているだけに、いっそう伝統的なコード化をはみ出していくのである。[25]

引用からうかがえるのは、ガタリが表現の素材を〈内容の素材を牽引するもの〉として捉えているということである。つまりガタリのなかに表現の素材の重視がある。実際、彼の論稿のなかで内容の素材という概念が出てくることはあまりない。それは内容の素材がイェルムスレウにとっては無定形な思考の塊であり、ガタリにとっては「物質流の連続体」[26]であるという理解のズレから来る扱いにくさによるものかもしれない。あるいは表現の素材が知覚的・感覚的なものであることから来る実践上の捉えやすさによるものかもしれない[27]。何にせよガタリは、その内容よりも表現の素材が過剰になるときに映画はシニフィアンの網の目をかいくぐっていくと考えるのである。

3-4. 強度、地層、そしてダイアグラムへ

表現の素材についてもう一点だけ触れておこう。この表現の素材にガタリは「強度」という重要な特徴を与えている。これは十中八九ドゥルーズ由来の概念であり、時空間に現れ出る以前の存在の度合いとして感性の対象となるものを表す概念である。ドゥルーズにとってもガタリにとっても最重要概念のひとつである「強度」を表現の素材に結びつけていることに、表現の素材という概念の重要性がうかがえる。では表現の素材と強度はどのような関係かといえば、表現の素材が強度とつながりを持っており、そのうえで強度を担い、強度を伝達するといった関係である。

ガタリのイェムスレウ論を考えるうえでこの「強度」という概念はひとつの指標となる。というのも、ガタリにとってイェルムスレウの言語理論は強度を積極的に肯定できない理論として映るからである。

> シニフィアンの記号論[sémiotiques]は、強度の多様体を表象し、無効化し、無力なものにして、それが形式-実質のカッ

プルに依存するように仕向ける媒介システムを打ち立てる。（…）シニフィアンの記号論は強度の素材に二重分節の地層の体制を課すのである。（…）イェルムスレウによって描かれる記号論的な地層にしても、このシニフィアンの記号論の地層が属している形式化の独自の様式にまだ属している。[28]

この「地層」という議論がイェルムスレウをある限界点に留まらせる。というのも、ガタリはその限界点を越えたところにダイアグラム論を設定するからである。どういうことかといえば、ガタリにとってダイアグラムが機能するのは究極的には表現と内容の区別が消失したところだからである[29]。だから地層のなかで記号の機能を捉え続けるかぎりは、表現と内容の区別が消える一線を踏み越えることができない。できるのは表現の素材によってその一線に極限まで近づくことだけである。

補足しておくと『草稿』では形式の位置にあったダイアグラムは『分子革命』では素材へと位置を変えている。また表現／内容の区別が消失することは形式／実質／素材が消失することとは別のことである。ガタリは前者の区別の消失後も後者の区別は有効であると考えている。ガタリが表現の素材にこだわるのは、それが人間の扱えるものだからである。そして、たとえイェルムスレウの言語理論がこの一線を越えられないとしても、人間は表現の素材を通してダイアグラムのほうへと実践的に越える（脱地層化する）ことができるというのがガタリの考えであり、この考えが『機械状無意識』や『千のプラトー』に引き継がれ、深められていくことになる。

結び

ここまで『草稿』と『分子革命』を通して 70 年代のガタリの思考を簡略に辿ってきた。以上から、ガタリにとってイェルムスレウの言語理論とは何だったかといえば、ラカン（派）の精神分析への批判という闘争的な論点を提供しながらもダイアグラムへの最後の一線を踏み越えられない理論となるだろう。しかし、一線は越えられないにしても、そこに線があること、そしてその向こう側があることを示すことに成功した理論ともいえる。表現と内容の区別がなければ、その区別の消失という事態を捉えることもできないからである。

つまり、ガタリの記号論におけるイェルムスレウの言語理論の価値は、本稿で取り上げた概念群が描くヴィジョンの有効性（実用性）にあるといえる。ガタリにシニフィアンからダイアグラムへの移行という難解な理路を描くことを可能にしたのは、まさしくイェルムスレウの概念群である。その有効性は単に理論的なものであるだけでなく、徹底して政治的なものでもあることを無視してはならない。ここにドゥルーズにはおそらくできない、ガタリ固有のイェルムスレウ理解がある。こうした理解によってこそ、意味作用（シニフィアン）から世界を逃がす理論と実践の基盤がガタリの思想のなかに創設されたのであって、『機械状無意識』や『千のプラトー』以降においてもさらに練り上げられていくことになるのである。

注

（1）Gilles Deleuze et Félix Guattari, *Mille plateaux*, Minuit, 1980, pp.57-58.（『千のプラトー』、下巻、宇野邦一ほか訳、河出文庫、二〇一〇年、一〇〇頁。）

（2）cf., Félix Guattari, “Des deux types de coupures”, *Écrits pour l’anti-œdipe*, textes agencés par Stéphane Nadaud, Lignes, 2012.（「ふたつのタイプの切断」、『アンチ・オイディプス草稿』、国分功一郎・千葉雅也訳、みすず書房、二〇一〇年。）ガタリが見出したイェルムスレウとスピノザの共通点についてまとめたものとしては次を参照。山森裕毅、「artifice の哲学と〈雀蜂-蘭〉の機械状生態学――フェリックス・ガタリ『アンチ・オイディプス草稿』より」、『hyphen』三号、二〇一八年。
https://dglaboratory.files.wordpress.com/2018/05/e38090e8ab96e88083e38091e5b1b1e6a3aee8a395e6af85e3808cartificee381aee593b2e5ada6e381a8e38088e99b80e89c82-e898ade38089e381aee6a99fe6a2b01.pdf
（最終アクセス日：二〇二三年八月一四日）

（3）本稿ではガタリの思想を辿るうえで避けて通ることのできない「スキゾ分析」、「抽象機械」、「脱領土化」、「アジャンスマン」などの独自語の使用を極力控える。正確を期すためには本来であれば欠かせないが、それらの聞き慣れない難解な用語の説明に追われてしまうことで、この短い論稿で伝えたいことを伝えられなくなることを恐れるためである。

（4）Louis Hjelmslev, *Prolégomènes à une théorie du langage*, traduit du danois par Una Canger, Minuit, 1971, p.64.

（『言語理論の確立をめぐって』、竹内孝次訳、一九八五年、五七頁。なお引用は仏訳を参照しつつ邦訳から行った。）

（５）Félix Guattari, *Écrits pour l'anti-œdipe*, p.365.（『アンチ・オイディプス草稿』、三四四頁。）

（６）Félix Guattari, ibid., p.268.（同書、二五六頁。）

（７）あるいはガタリの思想としては、社会に人を従属させるためにそのような機能を持つものとして言語としての無意識が精神分析によって発明された、と表現したほうが適切かもしれない。

（８）Félix Guattari, *La révolution moléculaire*, édition de Stéphane Nadaud, Les prairies ordinaires, 2012, p.450.（ジル・ドゥルーズ、フェリックス・ガタリ、『政治と精神分析』、杉村昌昭訳、法政大学出版局、一九九四年、九四頁。）

（９）Félix Guattari, *Écrits pour l'anti-œdipe*, p.365.（『アンチ・オイディプス草稿』、三四四頁。）

（10）Félix Guattari, ibid, p.365.（同書、三四四頁。）ここで対比されている「無意味」の原語は non sens、「非-意味」は a-sens であり、ガタリの記述から後者は infra-sens とほぼ同義だと考えられる。

（11）『アンチ・オイディプス』では、この記号素＝形象概念にさらにリオタールの形象論が接ぎ木されてシニフィアン批判が展開される。cf., Gilles Deleuze et Félix Guattari, *L'anti-œdipe*, Minuit, 1973, pp.289-291.（『アンチ・オイディプス』、宇野邦一訳、五六-五九頁。）

（12）Félix Guattari, op.cit., p.366.（前掲書、三四五頁。）

（13）『記号学小辞典』、脇阪豊・川島淳夫・高橋由美子編著、同学社、一九九二年、一六八頁。

（14）これはガタリがイェルムスレウとスピノザのあいだに見出す共通点のひとつである。またガタリは自身のいう「コード」をイェルムスレウの「形式」、そしてスピノザの「様態」と同一視している。

（15）cf., Félix Guattari, "Sur cette question du signe de puissance", *Écrits pour l'anti-œdipe*, pp.331-351.（「力能記号に関する質問について」、『アンチ・オイディプス草稿』、三一四-三三二頁。）また、ガタリのコード論および雀蜂と欄の婚姻については注（2）で示した山森論文も参照のこと。

（16）Félix Guattari, *La révolution moléculaire*, pp.381-382.（『精神と記号』、杉村昌昭訳、法政大学出版局、一九九六年、九頁。）

（17）Félix Guattari, ibid., p.211.（『分子革命』、杉村昌昭訳、法政大学出版局、一九八八年、一八四頁。）

（18）Félix Guattari, ibid., p.212.（同書、一八五頁。）

（19）Félix Guattari, ibid., p.399.（『精神と記号』、二八頁。）

（20）Félix Guattari, ibid., p.213.（『分子革命』、一八六頁。）

（21）Gilles Deleuze et Félix Guattari, *Kafka*, Minuit, 1975, p.85.（『カフカ』、宇野邦一訳、法政大学出版局、二〇一七年、九三頁。）

（22）イェルムスレウはこれをデンマーク語で mening とも呼ぶが、フランス語では sens、英語では purport と訳されるように、素材それ自体に「意味」という意味を持たせている（日本語訳者はこれを意味の原料と捉えて「原意」と訳している）。ガタリは『草稿』のなかでこのことに戸惑いを見せているが、『分子革命』ではこれを「機械状の意味」(sens machinique)と考えるようになる。

（23）Félix Guattari, op.cit., p.450.（『政治と精神分析』、九四頁。）記号学(sémiologie)と記号論(sémiotique)の違いを簡略に示すと、前者が言語の規則を基準に記号の機能を探求する学であり、後者が言語を記号の一分野として位置付けて記号の機能を探求する学といえる。前者の代表的な論者がソシュール、後者の代表的な論者がパースとされる。

（24）Félix Guattari, ibid., p.450（同書、九五頁。）

（25）Félix Guattari, ibid., p.389.（『精神と記号』、一七-一八頁。）

（26）Félix Guattari, ibid., p.449.（『政治と精神分析』、九三頁。）

（27）ガタリがメッツを参照しながら映画における表現の素材として挙げているものは、音声的な組成、音響的な組成、視覚的で色彩的な組成、色彩のない視覚的な組成、人間の身体の身振りと運動などである。cf., Félix Guattari, ibid., p.390. （『精神と記号』、一八頁。）

（28）Félix Guattari, ibid., p.435.（『精神と記号』、六九頁。）ガタリには記号論 sémiotique と記号学 sémiologie について明確な使い分けがなされていない時期がある。

（29）cf., Félix Guattari, ibid., p.437.（『精神と記号』、七〇頁。）本論のなかに入れ込むことはできなかったが、重要な論点と して触れておきたいのが、ガタリが表現に「言表行為の集合的アジャンスマン」、内容に「機械状アジャンスマン」という概念を当てていくことである。ということは、表現と内容の区別の消失とは言表行為のアジャンスマンと機械状アジャンスマンの区別の消失をも意味することになるが、これ自体がガタリの思想のなかでどのような事態を指すものなのか、丁寧に掘り下げていく必要のある主題といえる。

【論考】

ドゥルーズ『シネマ』における視覚的イメージの読解について

瀧口隆（大阪大学）

序論

本稿 (1) では、ジル・ドゥルーズ（1925-1995）の後期の著作である『シネマ２　＊時間イメージ』（1985）の第９章「イメージの構成要素」を中心に、『シネマ２』の潜在性についての議論の方向性を「視覚的イメージの読解」がいかにして導いていくのかを考察する。映画は映像と音からなる表現であり、言語による表現とは異なる。視覚的イメージ（image visuelle）の読解（lecture）とは、言語とは独立して視覚的なものが読まれうることであり、映画が「光」と「音」から成るという、映画が依拠するそのメディア的条件を指し示すものである (2)。そして『シネマ２』ではこの「光」と「音」の分離に沿って「潜在性」は問題化される。

視覚的なイメージに対する「読解」という態度は、『シネマ１＊運動イメージ』（1983）から、さらに『シネマ』が大きく依拠するアンリ・ベルクソン（1859-1941）の『物質と記憶』（1896）からの転換点である。さらには、そこからドゥルーズが「映画装置」に基づいて自身の哲学を展開するのである。ドゥルーズは、ベルクソンのイメージ概念を形而上学的に解釈し、それが「人間の知覚」の外、「物質の運動」を示すものと評価しながら、今まさに現前しているものに折り畳まれた「外」やその「潜在性」を「思考」する (3)。

ベルクソンにおいて「潜在性（virtualité）」は、あくまでも今まさに現実化されているもの、つまり「現働化（actualiser）」されているものを裏から支えるものであったのに対して、ドゥルーズは現働的なものの他でも在りうる在り方を、現働性の外としての「潜在性」をとらえようとする (4)。これが潜在的なものを現働化させずに実体化することであり、「時間イメージ」の記憶論はその一環としてのベルクソンの記憶論をとらえなおすものなのではないか。この試みは、視覚的イメージと発話行為がそれぞれの字義性をもち、「光＝見ること」と「音＝言表すること」を分離させる「映画装置」に準拠する。なぜなら、「見ること」と「言表すること」が一対をなしていない限り、私が見ている現働的なものを、別の仕方でそれを言表することができるからである。そしてこのように映画装置をとらえる発想は、後年の『フーコー』（1986）の議論に近接するのである。

では、本稿の構成を述べる。第１節では視覚的イメージに対する「読解」という態度は、『物質と記憶』と『シネマ１』から袂を分かつ点であることを指摘する。その上で、ベルクソンとの潜在性と現働性のとらえ方の違いを明らかにする。端的にいえば、ベルクソンの議論が身体運動図式の回復として記憶を問題にしているのに対し、『シネマ２』が潜在的な「記憶」は現働的なイメージに緊密に結びついているがゆえに、潜在的な次元においてイメージを増殖させると考えている。

このドゥルーズによる潜在性のとらえなおしは、視覚的イメージの読解という態度から導かれた。では言語に依拠しない視覚的イメージの読解はいかにしてなされるのか。これを本発表第２節において『シネマ２』第９章の議論から明らかにする。そしてそこで論じられることは、ドゥルーズが『フーコー』（1986）において論じる内容と共通することを、第３節で示す。つまり「視覚的イメージの読解」をめぐる議論を整理することで、『シネマ２』が示す、言語的ではない「視覚的なもの」の読解可能性に着目するとき、『シネマ２』の議論がベルクソンからミシェル・フーコー（1926-1984）へと向かうこと、ドゥルーズのフーコー解釈が『シネマ２』の思考論や記憶論の補助線となることを示したい。

１．イメージの「読解」へ

この節では、『シネマ２』においてイメージの「読解」が、ベルクソンとは異なる仕方で潜在性を問題化していることを述べる。ベルクソンの『物質と記憶』由来のイメージ概念において、それに対する読解という態度は、ベルクソンにおいても、『シネマ１』においても論じられることはなかったのであり、それゆえに『シネマ２』独自の観点だと考えられる。このベルクソンと袂を分かつ「読解」こそが、潜在性を現働化とは違う仕方でとらえる態度なのである。

ではまず、ベルクソン由来の「イメージ」を概観し、『シネマ１』から『シネマ２』の論の方向性の転換点がイメージの読解であることを確認する。『物質と記憶』において、「イメージ」は「感官を開けば知覚され、閉ざせば知覚されない」（MM, p.10/ p. 21）ものである、といった常識的な経験から定義づけている。イメー

ジとは、われわれの感官によって生き生きとして知覚されることと同時に、それが感官から独立して物質の次元で秩序をもっていることを両方とも肯定する。これはまた、「観念論者が表象と呼ぶものよりは多く、しかし実在論者がものと呼ぶものよりは少ない存在、つまりは「もの」と「表象」の中間に位置する存在」（MM, pp.5-6/ p. 10）とも説明される。つまり意識においてとらえられるものの「表象」と、その表象をつくりあげているとされるところの「ものそのもの」は、「イメージ」を介して繋がっている。

『シネマ１』ではこのイメージ概念を形而上学的に解釈する[5]。つまり物質とはイメージが作用反作用しつづける運動であり、われわれの主観によってとらえられる知覚はその物質の運動が変化したものに過ぎない。映画とは、所与の意識を設定することなく、物質の「運動イメージ」と主観的な「知覚イメージ」をダイレクトに結びつける装置なのである[6]。要するに「物質＝運動イメージ」と「知覚イメージ」はともに現働的な次元にあるのである。

しかし『シネマ２』ではこのようなイメージの変化は、現働的なレヴェルから潜在的なレヴェルへと移る。それは、『シネマ１』で論じられていたような物質の「運動イメージ」の変化ではない。「知覚イメージ」が破られることによる潜在的な次元でのイメージの変化は以下のように述べられる。

> しかしわれわれの感覚運動的図式が阻止され、破壊されてしまうなら、そのとき別のタイプのイメージが現れる。つまり純粋な光学的－音声的イメージであり、隠喩なしの純然なイメージであり、隠喩なしの十全なイメージであって、それはそれ自体のうちに、文字通り［littéralement］に、過剰な恐怖または過剰な美において、その根源的または正当化不可能な性格において、物を出現させる。［…］文字通りにであって隠喩的にではなく、工場は監獄であり、学校は監獄なのである。学校のイメージに監獄のイメージをつなげようというわけではない。それはただ二つの明瞭なイメージの間に一つの類似、混乱した関係を指摘することに過ぎないだろう。反対にあいまいなイメージの根底に、われわれが見逃してしまう判明な要素や関係を発見しなければならないのだ。（IT, p.32/ pp. 27-28［］は引用者）

知覚とは、身体の関心に合わせて物質の運動をとらえ、それをある一定の仕方で理解される対象にすることである。言い換えれば、目の前の物質の運動を見ることによってとらえ、「これは〇〇である」と言表しある一つの対象を指示することである。しかし知覚イメージが破られるとき、「純粋な光学的－音声的イメージ」が現れる。そしてそのイメージとは、「文字通りに」複数のイメージが重ね合わせられるようにして見られるのである。言い換えれば、画一化する紋切り型の知覚が破られるとき、反対にイメージは増殖する。それは運動イメージから知覚イメージへという現働的な変化ではなく、潜在的な次元での増殖であり、あいまいなイメージが複数のイメージへと読まれうるような潜在性を発揮するのである。

> 第二に眼が見者の機能に接近すると同時に、視覚的であるばかりではなく音声的でもあるイメージの諸要素は内的関係の中に入り、それによってイメージ全体が見られるだけでなく、「読まれ」なければならず、見ることができると同時に読むこと［lisible］ができなければならない。占い師の眼に似た見者の眼にとって、感覚的世界の「字義性［littéralité］」こそが、この世界を本として構成する。ここでもまたイメージあるいは描写の、独立と仮定された対象へのあらゆる参照は、すべて消えてしまうわけではなく、今は内的な要素や関係に従属し、このような要素や関係は、今や対象にとってかわろうとし、対象が現れるにつれて、たえずそれを移動させながら、それを消去しようとする。（IT, p. 34/ p. 30［］は引用者）

このように『シネマ２』において、イメージは知覚の対象から読まれる字義性へと変化する。このときイメージは、視覚的・音声的なイメージの諸要素の内的な関係に入り、複数のイメージに読まれうる潜在性を発揮させる。あるイメージをある一つの意味に還元するのではなく、それは多様な仕方で読まれうるあいまいなイメージである。知覚としてイメージをとらえることではなく、それがもつ潜在性を発揮させることこそがイメージの「読解」であり、イメージの「知覚」からの、さらには『シネマ１』から『シネマ２』への転換である。現働的な次元にあるイメージに付随する潜在的なイメージを読むこと。『シネマ２』における視覚的イメージの読解に着目するとき、このような仕方で潜在性を問題化していることが導ける。

ではこの「潜在性」とは何か。『シネマ２』はイメージ概念と同様に、ここでもまた『物質と記憶』に依拠し、「潜在性」を「記憶 mémoire」[7] の問題と結びつけて論じる。『物質と記憶』において、「記憶」とは「知覚」を裏から支える潜在的な次元として設定される。対象を見直す注意深い再認がなされる際、潜在的な次元の「純粋記憶」での探索が始まる。そこから身体が動きうる運動図式に入り込める記憶イメージ image-souvenir へと変化し、身体的運動が滞りなくなされるにしたがって、それは再び「知覚」

となる。つまり『物質と記憶』において、「記憶」といった潜在的な次元は、現働的な次元で身体的運動がうまくいかなくなったときに、対象を見ることと「これは〇〇である」と言表することの接続、身体が取りうる運動図式を回復させるための人間の精神的な営為として論じられる。

イメージの潜在性が主題となる『シネマ２』の「時間イメージ」とは、「記憶」にまつわるものである。しかし注意したいのは、『シネマ２』において「記憶」は、身体的運動図式を回復させることにおいて問題とならないことである。「記憶」は、「見ること」と「言表すること」の接続を試みるものの、それらが離接する限りにおいて、その接続は潜在的な次元で複数化される。記憶による描写は、対象を消し同時に別の対象を生み出す「創造と消去の二重の運動」（IT, p.65/ p. 64）として説明される。見ることにとどまって、視覚的イメージが読解されるかぎり再認は常に失敗する。ドゥルーズにとって「記憶」を問題とするとき、現働的なレヴェルでのイメージの解釈を復旧させることを目標にしない。『シネマ２』において、イメージは現働的なレヴェルと潜在的なレヴェルに二重化されており、むしろ現働的なイメージの裏側にある潜在的なイメージを見ることが重要なのである。

したがって、『シネマ２』から登場するこのイメージの潜在性を発揮させる「読解」という観点は、潜在的な記憶をベルクソンとは違う仕方で問題化することである。潜在的な記憶は、現働的な次元や現在を裏から支えるのではなく、むしろ現働的なイメージが、それに付随する潜在的な次元において別の仕方であることを肯定する[(8)]。現働的な次元と潜在的な次元は区別されつつも、それは識別不可能なほど緊密に結びついている。というのもそれは、現働的なイメージは常に別の仕方に読まれうる潜在性をもっている、ということである。現前するイメージが未来において別の仕方で思い出されるのであり、あるいは今現前しているイメージこそが、別の仕方で思い出されている記憶なのである。「記憶」において主題となっているのは、現働的なイメージと潜在的なイメージが識別不可能なほど緊密に結びついていることと、それゆえの増殖である[(9)]。

では次の問題は、この読解とは言語といかに切り離すことができるのか、である。見られるものの「字義性」とは、見られるものである限り、言語とは異なる字義性を獲得する。さらには再認が果たされない『シネマ２』の議論において、見ることと言表することは単一の接続が果たされない。ドゥルーズは記憶がまずもってたがが外れた回想であることを肯定する。ゆえに監獄が監獄であるだけではなく、字義通り工場は監獄であり学校は監獄なのである[(10)]。このことにおいて、このイメージの読解は言語と切り離せなければならない。視覚的イメージがいかにして読まれるようになるのかについては、サイレントからトーキー、さらにはジャン・リュック・ゴダールやストローブ＝ユイレといったドゥルーズが呼ぶところの「現代映画」について論じられる第９章にて問題となる。

２．視覚的イメージが読まれるとき

第１節ではイメージの「読解」という態度が、複数に読まれうるという仕方で、現働的なイメージに付随した潜在性を発揮させることを述べた。これは、『シネマ２』においては、ベルクソンとは違って、潜在的な次元を現働的な次元を裏から支えるものとして論じていないということである。むしろ潜在性は、現働的な次元と二重化され、他でもある在り方を肯定するものである。このことは、イメージの「読解」という態度から導かれるのである。視覚的なものがそれ自体において読解されることは、『シネマ２』の第９章で論じられる。

『シネマ２』第９章では、映画史のなかでイメージの構成要素である映像と音がいかなる関係を取り結び、いかにしてそれぞれの機能を変化させてきたのかが議論の主題となっている。このサイレント期から、ドゥルーズが呼ぶところの「現代映画」までの、視覚と音声との関係の変遷から見ていく。この章の冒頭では、サイレント映画の時代における視覚的イメージとショット間にさしはさまれるテキストの効果について述べられている。サイレントにおいてはもちろん「視覚的イメージ」しか存在せず、それは「見られるイメージ」と「読まれる字幕」からなる。見られるイメージは人間が関心を向ける自然を見せ、読まれる字幕は言語による言説として働く。つまり物語の状況や展開は、見られるイメージが示し、命令といった重要な発話行為（l'acte de parole）は、読まれる言説として提示されるのである。

映画に音声が加わる時、すなわちトーキー映画が登場すると、テキストと視覚的イメージの関係は変化する。テキストは視覚的に表示されるのではなく、聞かれることとなる。それによってトーキー映画において「会話」が発明され、それが映画の中心となる。「会話」は「発話行為」を、複数の人間間でやり取りされる相互作用とする。これにより映画は見られるイメージによって表現される物語ではなく、複数の人間による会話、「相互作用」を映し出す。会話をとらえる視覚的イメージは、会話している複数の人物のバストショットを切り替え続ける。「見られるイメージ」は「発話行為」という構成要素が挿入された視覚的イメージとして、可読的になるのである。このようにして、「視覚的イメージ」は純粋に見られるイメージとして可読的になるのだが、しかし映画は「会話」、複数人でやり取りされる「発話行為」に焦点を当てるのであり、この可読性は「発話行為」に大きく依拠する。

このようにトーキー映画において発話行為は見られると同時に聞かれるものとなるのだが、トーキーはその特性をおし進め、「発話行為」は「視覚的イメージ」から独立し自律性を獲得する。ドゥルーズが呼ぶところの現代的映画作家の作品においては、もはや発話行為は「音声的イメージ」として「視覚的イメージ」と乖離し始める。「音声的イメージ」は自律性を獲得することで、その内側から、「音声的イメージ」が語る出来事が遡られる。「会話」であれ、一人称的な「語り」であれ、「音声的イメージ」として自律性を獲得する発話行為は、それ自体としての字義性を獲得する。そしてこの「音声的イメージ」の自律性の獲得に、ドゥルーズは被写体による作話、すなわち「仮構作用」を見てとる[(11)]。発話行為は、空間に飛び交う「会話」ではなく、映画作家による一方的な「真理」に抗う、「偽なるものの力能」としての「作り話」となる[(12)]。

「音声的イメージ」が「視覚的イメージ」に依存することなく自律性を獲得するとき、「視覚的イメージ」はそれ自体として可読的になる。これによって「視覚的イメージ」は、発話行為とは独立して読まれるようになる。さらにそれは、「空間の基礎、「基盤」、言語［parole］以前または以後の、人間以前または以後の、このような沈黙した力能」（IT, p. 317/ p. 336［］は引用者）を提示するようになる。

> しかしこれはかつて、知覚することは、知ることであり、想像することであり、回想することである、といわれたような意味においてではなく、読解の眼の一機能であり、知覚の知覚であり、想像、記憶、知といった知覚の裏側をとらえることなしに知覚をとらえることのない知覚である、という意味においてである。端的にいえば、われわれが視覚的イメージの読解とよぶものは、地層の状態であり、イメージの反転であり、これに対応して、空虚を充実に、表を裏にたえず変換する知覚行為である。読むとは、連鎖させるかわりに再連鎖させること、表をたどるかわりに、めくり裏返すことであり、新たなイメージの〈分析法〉なのだ。（IT, p. 319/ p. 338）

読解される視覚的イメージは、現働的な知覚イメージを映しつつも、それは常に知覚の裏側、現働的なイメージに付随する潜在的なイメージをとらえるのである。視覚的イメージの「字義性」とは、まさに「音声的イメージ」と「視覚的イメージ」がそれぞれで自律性を獲得し、それゆえに離接することである。そして「視覚的イメージ」は、言語から離れてそれ自体として読解されるようになるのである。このとき「視覚的イメージ」は、潜在的なイメージをとらえることを要請する「新たなイメージの〈分析法〉」によって読解される。

視覚的なイメージが言語によらないでそれ自体として読まれる、というのは「見ること」と「言表すること」を分離することである。そしてこの視覚的なものの「字義性」の獲得はまさに、第１節で示したことと同様にベルクソンと袂を分かつ点なのである。第１節で取り上げた再認とは、あいまいなイメージを「見て」、ある意味をもった対象として指示すること、すなわち「これは○○である」と「言表する」ことである。再認における、身体的な運動図式の回復とはまさに「見ること」と「言表すること」の一対の結合の回復である。再認がうまくいくとき、身体の関心、身体が行為することの関心にそって目の前の対象が言表される。『シネマ２』の「視覚的イメージ」と「音声的イメージ」の分離が批判するのは、まさにこの「見ること」と「言表すること」の一致である。ドゥルーズにとって、映画は徹底して見ることしかできないのであり、それはつまり「見ること」と「言表すること」が分離したままのメディアであることを意味する。分離している限りにおいて、今見えているイメージは、字義通りに「工場」であり、「学校」であり「監獄」なのである。

要するに、現働的な次元に付随する潜在性を発揮することは、この「視覚的イメージ」と「音声的イメージ」それぞれが、それぞれに固有の「字義性」を獲得することによってである。ドゥルーズによれば、それはまさにフーコー的発想である。この章において一度だけではあるが、ミシェル・フーコーの名前を出している。

> 一つの世界がある歴史的モメントから抜け出て、別の歴史的モメントへ入ろうとする行程をしるしづけ、言葉と物、つまり言語行為［acte de parole］と地層化された空間による二重の桎梏のもとで、新たな世界の困難な出産をしるしづけるような闘争が、いたるところにあるのだ。これは喜劇的なものと惨劇的なもの、途方もないものと日常的なものを一度に呼び起こすような歴史の構想である。言語行為［actes de parole］の新しいタイプと、空間の新しい構造。ほとんどミシェル・フーコーのいう意味における「考古学的」な構想。（IT, p. 323/ pp. 341-342［］は引用者）

この引用にみられるように、「発話行為」と、視覚的イメージが示す言語以前の「地層化された空間」という二重性は、まさにフーコー的発想であると述べられる。そして、「発話行為」と「視覚的イメージ」を明確に区分することは、ドゥルーズが後年の『フーコー』（1986）において論じるときの強調点と共通している。

このように『シネマ２』において、ベルクソンからの離反は、フーコーへと近接するのである。

ドゥルーズの『フーコー』（1986）において、この二つの区分に重点を置いていることを見て、この視覚的イメージの読解を考えるにあたって、ドゥルーズのフーコー論が補助線となることを次節で示す。

３．『フーコー』における可視性の自律

ここで本発表の第１節と第２節の論点を整理する。潜在的なものにかかわる「記憶」は、ベルクソンにおいては知覚の回復において問題になっていたのに対し、『シネマ２』ではむしろ現働的なイメージが他でも在りうること、すなわちそれに付随する潜在的なイメージを掘り起こしていく。このイメージの複数性は、知覚することではなく、徹底的に見ることにとどまりイメージを読むという態度によって可能になる。そして現働的なものに付随した潜在性の発揮は、「視覚的イメージ」と「発話行為」が常に間隙をもつことによって可能になるのである。ベルクソンとは異なる仕方での潜在性についての問題提起は、ドゥルーズにとってのフーコー的発想によって支えられている。

この歴史のなかで形成される言説に「見ること」と「言表すること」の明確な区別を見ることは、ドゥルーズの『フーコー』にも共通して見られる。ドゥルーズは、『シネマ２』を執筆した翌年、1986 年に『フーコー』を出版する。特に「見ること」と「言表すること」の区別は、『シネマ』に関する講義の後の 1985 年になされた講義から指摘されたことである [13]。そのなかで歴史的に形成される言説は、「可視性（visibilité）」と「言表（énoncé）」が蓄積した「地層」とよばれる [14]。

さらに「一つの時代は、それを表す言表や、それを満たす可視性に先立って存在するのではない」（F, p.56/ p. 92）と言われるように、具体的な言表と可視性そのものが歴史的な言説、「知」をつくるのである。よって言表可能なものを読み、可視的なもの見る統一的な主体あるいは主観は存在しない。これら可視的なものが見られ、言表可能なものが読まれる条件は、それを見て読む主体の側にあるのではなく、言表の側、可視性の側にある。言表と可視性は、それぞれ言表可能なものが読まれ、可視的なものが見られる条件をもつのであり、この意味で言表と可視性は明確に区分されるのである。この区別に、ドゥルーズは重点を置く。

> 『知の考古学』は、言説的形成としての言表の規定的役割を主張することができる。しかし可視性もまた、やはり還元不可能なものなのである。なぜなら可視性は、規定可能なもののある形態［formes］に関わっていて、決して規定の形態に還元されてしまうことはないからだ。［…］問題は、二つの形態、あるいは性格の異なる二種類の条件の整合ということである。私たちは、フーコーにおいて、変形されてはいるが同じ問題を再発見する。二つの「そこにある」の関係、光と言語、規定可能な可視性と規定を行なう言表とのあいだの関係という問題である。（F, pp. 67-68/ pp. 114-115［］は引用者）

つまり言語からなる言表は規定的役割という〈自発性〉を形成し、光からなる可視性には規定可能なものの〈受容性〉を形成する [15]。言表は、規定可能なものを規定する以上、フーコーはそこに言表の優先性を認めるのだが、とはいえ可視性は言表に還元されるわけではない。可視的なものは主体や言葉の形態の内にではなく、可視的な光の形態の内でその条件をもつのである。

これはいったいどういうことか。『フーコー』において、いかにして可視的なものは見られるのだろうか。そこでは見えるものの条件は、可視性の「外部性の形態（forme d’extériorité）」であると述べられる。外部性の形態とは、意識の外に分布する「監獄」といった形をもったものである。要するに、「見るもの」と「見られるもの」を配置することによって「見られるもの」は形成される。外部性の形態で構成される可視性の場において、見られるものが可視的になるのである。囚人は、「刑法」という言葉によって規定されてはいるものの、それによって見られるわけではない。そうではなく「監獄」という建築によって見られるのである。ドゥルーズは、〈一望監視装置〉について、「見ることができずに見られる囚人」と「見られることなく見る観察者」を配置する「監獄」の建築の設計こそが可視性の条件、つまり見られるものを決定していると考える。

言表が言表可能なものの形態を条件とするように、可視的なものの形態によって可視性の条件が生まれ、見られるものが決定するのである。その条件はすでに主体の意識ではなく、外部に具体的な形態をもって分布しているのである。見られるものの条件が、可視性の場をつくりだす可視的なものの形態であるがゆえに、超越論的な主体を立てることなく、さらには言語とは区別される仕方で見られるものは形成されるのである。そしてこの「見ることと話すことの分離のもっとも完璧な例は、映画のなかにある」（F, p. 71/ p. 122）と述べられる。

> 物と言葉にとどまっている限り、私たちは見ているものについて語り、語っているものを見ていると、また二つは結合していると、信じることができる。それはつまり、私たちが経験的な実践にとどまったままであるということだ。しか

し、言葉と物を切開するなら、言表と可視性を発見するなら、言葉と視覚はたちまち、ある高次のア・プリオリな実践にまでたどりつく。すると、どちらもそれ自身を他から分かつ自身の限界に、見られることしかできない可視的なもの、語られることしかできない言表可能なものに到達するのだ。それでもやはり、それぞれを分割する固有の限界は、二つを関係づけ、盲目の言葉と無言の像という、二つの非対称的な面をもつ共通の限界でもあるのだ。フーコーは、奇妙にも、現代の映画に非常に近い。（F, p. 72/ p. 124）

ここでは『シネマ２』第９章と同様に、ストローブやマルグリット・デュラスの映画作品が挙げられ、それらは発話行為と視覚的イメージが見せるものの分離の例として述べられている。映画は、言表と可視性のア・プリオリな分離の実践である。可視性は受容される規定可能なものを見せ、言表はそれを規定する役割を果たすのだが、それでもそれぞれでその条件をもっており、その条件は言表であれば言葉として、可視性であれば光として、すなわちそれぞれの外部の形態として与えられるのである。このような分離を保ちつつ、言説は両者の関係のなかで形成されていく。ドゥルーズがフーコー論において強調する点は、言表と可視性の分離であり、その最たるものとして映画を取り上げている。

このようにドゥルーズが『フーコー』において強調するのは、歴史的形成物として「知」において可視性と言表が還元不可能な仕方で区別されてあることである。そして、その後の議論において、この両者の関係づけを行う審級について論じられる。つまり、「見ること」と「言うこと」を関係づけ、それら二つの形態からなる「知」の形成を現実化するのは「権力（pouvoir）」である[(16)]。これはカントにおける、直観によって受容される感性とそれを規定する悟性を正しく整合させる「想像力の図式」のようなものである。「権力」はこの可視性と言表が常にかかえる間隙としての「外（dehors）」で働く。「権力」は、可視性と言表を結びつけることで「知」を形成させる。

しかし同時にこの関係づけは「外の思考」の問題でもあると指摘される[(17)]。この絶対的な間隙の再連結をする「思考」によって、そのような思考をする主体が、外を折りたたまれてあることを示す。ここにもまた『シネマ２』の「思考しえぬものの思考」と同様の問題が現れる。このことについては今後の課題とするが、このように展開するフーコー論は、知における「見ること」と「言表すること」の区別が前提とされており、そして『フーコー』においてそれはまさに現代映画的発想なのである。

結論

ここまでの議論を概観すると『シネマ』は、ベルクソン由来の概念に依拠しつつも、『シネマ２』でのベルクソンとの潜在性へのアプローチの仕方の違いによって、ドゥルーズの『フーコー』における議論に近接していくことがわかる。第１節において、『シネマ２』でイメージは知覚ではなく読解されるものとなり、またその読解は現働的なイメージに緊密に結びついた潜在的イメージを発掘する、と述べた。この現働性が常にもつ潜在性をとらえることが、ドゥルーズ的な潜在性についての問題意識である。イメージの読解は、潜在的なものの現働化とは異なる仕方で潜在性へと向かうことを決定づけている。

さらに『シネマ２』のイメージの読解という態度とは、「イメージ」が言語とは異なる感覚的世界の「字義性」を獲得するという意味である。それは、「視覚的イメージ」と「言葉」を分離させる。第２節では、第９章がサイレント期からトーキー、さらに時代を経るごとに、発話行為と視覚的イメージが分離することで視覚的イメージがそれ自体として読まれることを確認した。つまり『シネマ２』にとって映画とは、「見ること」と「言うこと」のあいだに常に間隙をもち続けるメディアなのである。両者の合致こそがすでにある意識による知覚、回想なのである。反対に映画ではそれらが分離する以上、イメージはそれがもつ潜在性を発揮し、それによって新たな主体、「来るべき民衆」にとっての記憶になるのである。

さらにこの議論は、『シネマ２』の翌年に出版された『フーコー』の議論と近接することを第３節において示した。ドゥルーズがフーコー論において強調したのは、歴史的形成物である「知」において「見ること」と「言うこと」が分離していることである。ベルクソンからフーコーへの移行という補助線を引いてみると『シネマ２』の議論が、視覚的イメージがそれ自体で読解されるものであるとして、可視性を言表から分離させ、このフーコー的発想を前提として、ベルクソンとは異なる仕方で潜在性を問題としていることがわかる。

では、『フーコー』を受けて『シネマ２』についてどのように議論できるか、特に「記憶」についてどのように議論できるか、その展望を提示して本発表を締める。『フーコー』において、記憶とは主体を形成することである[(18)]。『フーコー』では、認識する主体、あるいは回顧する主体はあらかじめ設定されない。この主体の形成は、「見ること」と「言うこと」を結びつける「権力」あるいは「思考」によって行われる。それゆえに、非人称的な場から「新たな主体」を打ち立てることを画策できるのである。

『シネマ２』において視覚的なイメージと発話行為が自律性を獲得し離接するとき、発話行為は、被写体の作話という意味での「仮構作用」となると述べた。『シネマ２』ではストローブ＝ユイ

レを参照するなかで、この発話行為自体が抵抗行為だと述べられる。つまり言説が「視－聴覚」的になることは、明確な主体が前提とされない、非人称的な言説が広がる空間での抵抗の始まりである[19]。一方的な植民者＝作家による歴史＝物語に抵抗して、埋もれていくテキスト、言表を、発話行為を通して生み出していくことが、「視－聴覚」の離接に賭けられている。

これは、『シネマ２』における政治的映画の議論の出発点といえよう。プロパガンダ映画に対抗するような現代的な政治映画、あるいはそこで参照される文化人類学者兼映画作家のジャン・ルーシュの作品などは、民衆が欠いていることを前提とする。だからこそ、来るべき民衆を作り上げる仮構作用として働く発話行為が重要視されるのである。さらに「仮構作用はそれ自体記憶であり、記憶とは、民衆を生み出すことなのである」（IT, p. 290/ p. 309）。

このように「記憶」とは、あったことを思い出すことではなく、それは現在に抗して別の仕方で思考し、新たな民衆を立ち上げるための「記憶」として打ち立てられるのである[20]。これが、ベルクソンとは異なる仕方で潜在性をとらえることを目指すドゥルーズによる記憶論の方向性である。このことに関しては、『フーコー』を補助線としながら、『シネマ２』の議論を紐解いていくことによって明らかになるだろう。そしてそれは、「視覚的イメージ」がそれ自体として読まれる字義性を獲得し、映画が徹底して「見ること」と「言うこと」が分離されるメディアであることが出発点となっているのである。「視覚的イメージ」の読解によって明らかになるのは、このような『シネマ２』の読解の展望である。

注

（1）本稿において、『シネマ１』と『シネマ２』の二巻双方を指すときは、『シネマ』と呼称することにする。

（2）平倉 2010 は、『シネマ』のゴダール論の批判の一環で、ドゥルーズによる視覚的イメージに読解をさしはさむ身振りを取り上げる。対してゴダールは「読解」という見ることに外在的な審級をもち出すことなく、徹底的に見ることに内在すると述べられる。しかし本発表においてこの視覚的イメージの読解とは、言語を借り受けて読むことではなく、視覚的イメージに言語から自律した読解可能性を与えるのであり、むしろ「見ること」への内在を可能にすると考える。

（3）小泉 2019 は、『シネマ』がベルクソンのイメージ概念を人間中心の主観を設定せず人間の外の「物質の知覚」を可能にするものとして評価しているとし、それを基盤に、旧来の生命が絶たれた後に新たな生命の到来を待ち望み思考するドゥルーズ哲学の側面を提示する。福尾 2020 は、『シネマ』のイメージ概念が哲学にとっての外の非－哲学の役割を果たすことがイメージの実践価値としている。ともに、『シネマ』がイメージの内在平面に準拠しながら、「外」を思考するものとして解釈している。本稿では、この「外」は、『シネマ２』では見ることと言表することの間隙という映画のメディア的条件から生まれると考える。

（4）このベルクソンとの「潜在性」に対する問い方の違いは、藤田 2013 を参照。

（5）このイメージ概念の形而上学的解釈について、さらには『シネマ１』がそれに属することの指摘は岡嶋 2017 を参照。

（6）「要するに、意識は光であるというのではなく、かえって諸イメージの総体すなわち光が意識であり、物質に内在するということなのである。」（IM, p. 90/ p. 110）詳しくは IM 第４章「運動イメージと三つの種類－第二のベルクソンの注釈」の議論を参照。

（7）mémoire と souvenir のベルクソン研究における訳し分けについては藤田 2022 参照。souvenir は或る過去の印をもった「思い出」であり、mémoire は、思い出す力や働きを示す。『シネマ２』邦訳においては souvenir が「回想」、mémoire が「記憶」と訳されている。『シネマ２』においては、souvenir は「過去→現在→未来」といった単線的時間軸をあらかじめ設定したうえでの「過去の回想」を意味し、mémoire は現働的なものに付随した潜在性にかかわる「記憶」を意味すると考える。もちろんドゥルーズは mémoire の方を重要視し、主題としている。

（8）これは、現実を写実的にとらえるのではなく現実からの作用ではあるものの、そこから超出されるイメージに自律性を認める、ドゥルーズのネオリアリズム、およびアンドレ・バザンのネオリアリズムの美学的評価の方向性と軌を一にするだろう。このことに関して詳しくは、黒木 2020 を参照。

（9） 最晩年に執筆された「現働性と潜在性」参照。「現働的なものと潜在的なものの関係はつねにひとつの回路を構成するが、それは二つの仕方においてである。すなわち、ある場合には、潜在的なものが現働化されるような巨大回路の中で、現働的なものが〔自らとは〕別のものとしての潜在的なものに向かうという仕方で、ある場合には、潜在的なものが現働的なものと結晶化するような最小回路の中で、現働的なものが自分自身の潜在的なものとしての潜在的なものに向かうという仕方で。」（D, p. 185/ p. 256）

（10）これこそが、福尾 2017 が指摘するような「純粋記憶」を文字通り読むドゥルーズの試みであると考える。それは現働的なイメージに緊密に結びついた潜在性を、監獄にむすびついた工場と学校のイメージを文字通りにとらえることで、潜在的な次元でイメージを増殖させることである。さらにそれは、イメージが視覚的な「字義性」を獲得し、言語と分離させられることによる。

（11）IT, p. 316/ p. 335 参照。

（12）この議論については、IT 第 6 章「偽なるものの力能」を参照。

（13）『フーコー』のうち、「古文書からダイアグラムへ」と題された前半部は、『シネマ』以前に執筆されたものをもとにしているが、「トポロジー、「別の仕方で考えること」」と題された後半部は、1985 年から 1986 年になされた講義をもとに執筆されたものである。特に一回目の講義において、フーコーにおける「見ること le voir」と「言表すること le parler」の区別を指摘している。詳しくはドゥルーズの講義録 The Deleuze Seminars（https://deleuze.cla.purdue.edu/）の Foucault, 01, 22 OCTOBER 1985 参照。

（14）この「地層」という表現は言語学者のルイ・イェルムスレウ（1899-1965）に由来する。小林 2013 によると、記号を「表現」と「内容」に分けそれぞれがそれぞれ固有の形式と実質をもつとするイェルムスレウの言語学は、60 年代のドゥルーズ哲学から継続される言語にまつわる問題に対して一定の回答与えるとして、『千のプラトー』（1980）の言語論において高く評価される。さらにこのイェルムスレウの言語観はフーコーの議論に結び付けることができると指摘している。その議論の方向性に『シネマ２』の「見ること」と「言表すること」の区分の議論も位置することができるだろう。

（15）この〈自発性〉と〈受容性〉は、カントの悟性と直観に対応するように論じられている。F, p. 67/ pp. 113-114 参照。

（16）「知の背後に、現象学が願うような起源的で自由な野生の経験は存在しないとすれば、それは〈見ること〉と〈話すこと〉とが、いつもすでに権力関係のなかにまるごと捕らえられているからである。〈見ること〉と〈話すこと〉とは、権力関係を前提とし、これを現実化するのだ。」（F, p. 89/ p. 153）

（17）「しかし、思考することは、〈二つのあいだ〉、間隙、あるいは見ることと話すことの分離において行なわれる。」（F, p. 124/ p. 220）

（18）「時間とはそれゆえ、主体性の本質的な構造を構成する「自己情動」であった。しかし、主体あるいは主体化としての時間は、記憶と名づけられる。後でやってきて忘却にさからう、あの短い記憶ではなく、現在を二つにし、外を二重化し、忘却と一体になっている「絶対記憶」である。この記憶はそれ自体たえず忘れられて再形成されるからである。」（F, p. 115/p. 200）

（19）廣瀬純 2000 を参照。

（20）「現在に抗して過去を考えること。回帰するためでなく、「願わくば、来るべき時のために」（ニーチェ）現在に抵抗すること、つまり過去を能動的なものにし、外に現前させながら、ついに何か新しいものが生じ、考えることがたえず思考に到達するように。思考は自分自身の歴史（過去）を考えるのだが、それは思考が考えていること（現在）から自由になり、そしてついには「別の仕方で考えること」（未来）ができるようになるためである。」（F, p. 127/ p. 226） 小倉 2018、2019 では「仮構作用とは記憶ではない」と『哲学とは何か』において論じられることから、『シネマ』の議論および「記憶」の観点は、晩年のドゥルーズの哲学からは見限られるとする。しかし『シネマ』で論じられる「記憶」は、過去の蓄積としての純粋記憶ではなく、むしろ現在に抗して「記憶」を新たな民衆のために打ち立てる問題として論じられる。よって晩年のドゥルーズ哲学においてこの記憶論は単純に切り捨てられるものではない。

参考文献

IM : Gilles Deleuze, *CINEMA1: L'IMAGE-MOVEMENT*, Minuit, 1983. （ジル・ドゥルーズ，『シネマ１＊運動イメージ』，財津理／斎藤範訳，法政大学出版局, 2008.）

IT : ―――, *CINEMA 2: L'IMAGE-TEMPS*, Minuit, 1985. （―――，『シネマ２＊時間イメージ』，岡村民生／大原理志／江澤健一郎／石原陽一郎／宇野邦一訳，法政大学出版局, 2006.）

F : ―――, *Foucault*, Minuit, 1987. （―――，『フーコー』，宇野邦一訳，河出文庫, 2007.）

D : ―――/Claire Parnet, *Dialogues*, Flammarion, 1996. （―――／クレール・パルネ，『ディアローグ――ドゥルーズの思想』，江川隆男／増田靖彦訳，河出文庫, 2011.）

MM : Henri, Bergson, *Matière et mémoire*, Les Presses universitaires de France, 1965[1896]. （アンリ・ベルクソン，『物質と記憶』，杉山直樹訳，講談社学術文庫, 2019.）

岡嶋隆祐，「ベルクソン『物質と記憶』におけるイマージュ概念について」，『フランス哲学思想研究』，日仏哲学会, 22 :100-111, 2017.

小倉拓也，『カオスに抗する闘い：ドゥルーズ・精神分析・現象学』，人文書院, 2018.

―――，「現行犯での伝説化――ドゥルーズの芸術論における映画の身分についての試論」，檜垣立哉／小泉義之／合田正人編．『ドゥルーズの 21 世紀』，河出書房新社, pp. 37-54, 2019.

小泉義之，『ドゥルーズの霊性』，河出書房新社, 2019.

小林卓也，「ドゥルーズ哲学と言語の問題――『千のプラトー』におけるイェルムスレウ言語学の意義と射程」，『京都産業大学論集』，京都産業大学, 46(46) :181-194, 2013.

黒木秀房，「リアリズムの問題の哲学的射程――ドゥルーズ『シネマ』におけるネオレアリズモを出発点として」，『フランス哲学思想研究』，日仏哲学会, 25:102-112, 2020.

平倉圭，『ゴダール的方法』，インスクリプト, 2010.

廣瀬純，「ひとつの生とオーディオ−ヴィジュアル」，ロベルト・デ・ガエターノ編，『ドゥルーズ、映画を思考する』，廣瀬純／増田靖彦訳，勁草書房, pp. 337-370, 2000.

福尾匠，『眼がスクリーンになるとき　ゼロから読むドゥルーズ『シネマ』』，フィルムアート社, 2017.

―――，「ドゥルーズ『シネマ』におけるイメージ概念の実践的価値」，『常盤台人間文化論叢，横浜国立大学都市イノベーション研究院, 6(1):5-31, 2020.

藤田尚志，『ベルクソン　反時代的哲学』，勁草書房, 2022.

―――，「生命哲学の岐路」，金森修編，『エピステモロジー――20 世紀のフランス科学思想史』，慶應義塾大学出版会，pp. 323-407, 2013.

【論考】

「存立性（consistance）」概念について
―フェリックス・ガタリにおける機械の問題―

尾谷　奎輔

序論

周知のように、20世紀後半に活躍した思想家であるフェリックス・ガタリ(1930-1992)は、フランスの哲学者のジル・ドゥルーズ(1925-1995)と共に『アンチ・オイディプス』(1972) や『千のプラトー』（1980）といった著作を公刊した。彼らの著作群において「機械」が重要な概念であり、また「機械」概念がガタリによって練り上げられたことは比較的よく知られている。ガタリ自身による、『分子革命』の英語版で版元の依頼により執筆された用語集のなかで、「機械」概念を次のように定義している。

> 機械は相互に産出しあい、選択しあい、廃絶しあい、新たな可能性の諸線を現出させる。広義の機械――たんにテクノロジー理論的・社会的・審美的等々の機械――はけっして単独ではなく、集合によって機能する。たとえば、工場のひとつのテクノロジー的機械は、社会的機械や職業教育機械、研究機械、商業機械などとの相互作用によって作動する（MR, p.289）。

この一節によれば、「機械」とは社会や技術といった様々なスケールの諸領域を接続する領域横断的な概念として定義されている。このような、領域を横断しつつ様々な諸要素を結合（ないし切断）するものとしての「機械」概念理解は多くの論者によって緩やかに共有されてきた。

しかし、ガタリが「機械にとっての問題は接続されるか、しないか」（RM, p.321）であると言明するとき、われわれにとって、領域横断的に「接続される」という事態そのものの内実が未だに不明確であり、「接続」という出来事の事柄そのものについて明らかにされていない。「存立性」という概念の解明が、様々な諸対象を「接続する」という事態の解明に直結するのであり、「存立性の獲得」の成否が「接続するか、しないか」という「機械の問題」に応えるものでなければならない。

本稿ではこれまで十分に論究されることがなかった「存立性〔consistence〕」概念の内実を明らかにする。そして、「機械の問題」とは「接続されるか、しないか」というガタリのテーゼは、臨床的実践や政治的実践を架橋とする「機械」概念を核心とするガタリの思想において、「存立性の獲得」という問題に集約されることを示す。

本稿の議論構成は以下のとおりである。第一に、問題の所在を明確にするために、「存立平面」および「存立性」概念に関する研究状況を概観する。第二に、1971年の草稿「存立平面」およびその草稿をもとにした『分子革命』版の「存立平面」(1977)で参照される論理学者のロベール・ブランシェの『公理系』(1955)を通じて、数学における「存立性」概念について確認しつつ、『公理系』の議論の限界について検討する。第三に、ガタリが物理学者のジャン＝マルク・レヴィ＝ルブロンの議論から、機械的な「存立性」概念としての性格を取り出したことを明らかにする。以上を踏まえ、「存立性」概念の存在論的側面と社会的側面について検討したのち、議論を総括する。

1.問題の所在

まず確認しておきたいのだが、『アンチ・オイディプス』出版のために準備したガタリの草稿のなかで、ガタリは自らの概念として「存立性」概念を使用し始める。ガタリは、なかでも「ふたつの切断」と名付けられた『草稿』で、「実体（substance）にとって代わるもの、それは存立性（consistance）だ」（EAŒ, p.379）というテーゼを提示している。哲学の歴史のなかで問い直され続けてきた「実体」概念は、何が存在するが、何をもって存在者足り得るかという存在論的論究において、それに応答する主張を展開するために継承されてきた概念である。上記のテーゼからわかるように、「存立性」概念は、ドゥルーズとガタリとのあいだで共有される重要な概念として議論の対象になってきた。「存立性」概念は71年の「存立平面」と題された草稿で練り上げられたものであるが、80年代後半以降の著作『分裂分析的地図作成法』(1989)や『カオスモーズ』(1992)で「存立性」概念の重要性を確認することができる。

本稿では、「スキゾ分析」という用語についての理論的特徴および臨床的意義について立ち入らないが、ガタリは独自の臨床的実践である「スキゾ分析」と「存立性」概念を以下のように結び付ける。スキゾ分析は「潜在的な分岐と差異化の線が存立性を獲得するように働きかける」(Ch p.89)。また、「集団的言表行為」という用語についても深く立ち入らないが、政治的実践と深く関係する「集団的言表行為」と「存立性」の関係は次の一文によって簡潔に例示することができる。「レオナルド・ダ・ヴィンチが飛行機を空想したとき、彼はそれをデッサンし、設計図を描いたが、事態はそこから進まなかった…しかし、それ以後この問題は存立性を獲得した。すなわち、この問題は集団的言表行為をもつようになった」(CS,176-177)。つまり、「スキゾ分析」のような臨床的実践、あるいは社会実践的な「集団的言表行為」は「存立性の獲得」が焦点になっている。

さらに、ドゥルーズとの共著作『哲学とは何か』(1991)では哲学の営みを概念創造とし、「哲学の問題は、思考が浸っている無限を失うことなく、ある存立性を獲得することである」(QP,45)という文言は「存立性」の重要性を示している。

これまでの研究では、「存立性」の派生概念である「存立平面」がガタリの思想の核心をなすと指摘されてきた。例えば、Watson はジャック・ラカンのマテーム(数学素)の対抗概念として「存立平面」および「存立性」概念を構築し、70 年代初頭から最晩年にかけて、ガタリに内在する思想の中心的役割を担っていると指摘している(Watson [2009] ,p.63-64)。

しかし、存立平面(plan de consistance)の理解には、まずもって存立性(consistance)の理解が必要である。なぜなら、「存立平面」は、草稿「存立平面」のなかで「非存立性の原則」であると定義されるが、当の「存立性」の概念規定が十分ではないからである(EAŒ,p.408)。

たとえば、ドゥルーズとガタリの共著研究の観点からダヴィッド・ラプジャードは、「存立性」を簡潔に物質の「関係の安定性」として特徴づけており(Lapujaded [2014] ,p.186)、またピエール・モンテベロは「存立性」概念について一章分を割き、『千のプラトー』から遡及して、60 年代のドゥルーズの著作群を参照しながら個体化論について論じている(Montebello [2008] ,p.97)。しかし、両者ともにガタリ自身のテクスト群を精査していないため、「存立性」概念について十分に明らかにしていない。また、ガタリの単著研究の観点から、Watoson は「社会的、心的なものの形成を取り纏める最小限の一貫性」[(1)]として「存立性」概念を定義しているが、その一貫性がいかにして保持されるのかを十分に明らかにしていない(Watoson [2009],p.164)。

もちろん、序論で述べた通り従来の研究でも、存立平面の哲学上の意義は議論されてきた。たしかに、現在の研究でもドゥルーズの「実体」概念の変容という観点から「存立平面」概念の解明に着手されていることは認められつつある[(2)]。

しかし、ガタリによる「存立平面」の意味内実を検討した上で、当の概念がドゥルーズ哲学における「実体」概念の変遷に深く関わっていることについては十分に議論されていない[(3)]。Igor Krtolica は、存在論から政治哲学への移行という観点から、1960 年代から 1970 年代にかけてのドゥルーズのスピノザ読解における「実体」概念の変遷に着目している(Krtolica [2021] ,p39-41)。しかし、ガタリがドゥルーズの「実体」概念の変遷に関与していないと判断した上で(Krtolica [2021] ,p32)、ガタリが練り上げた当の「存立平面」の意味内容について論究していない。本論では上記の先行研究を踏まえつつ、「存立性」、「存立平面」について議論する。

2.「数学的存立性」について

まず、当時のフランスの哲学史研究において流通していたと思われるconsistanceという語の用法について、アンドレ・ラランドによる『哲学の技術的批判的辞典』の「存立性(consistance)」の項目を確認しておきたい。以下のように定義されている。①「つかみどころがなく、矛盾しない思考の特性、教義や議論の論理的な堅さ。より特殊な言い方をすれば、公理系が無矛盾であれば一貫性があると言う。」②「堅実で、恣意性や偶発的な状況に依存せず、永続性と客観性のある性質を持つもののこと」であると記されている(André Lalande,[2006], p.177-178)。ただし、ガタリの「存立性」の意味内実は無矛盾性や堅固さ、安定性といった従来の「存立性」理解以上の含意が見いだされる。

当の「存立性」概念は1971年の「存立平面」と題された草稿で練り上げられたものであるが、ガタリは『分子革命』所収の「欲望のミクロ政治学に向かって」のなかで、数学的公理体系から「存立性(consistence)」の概念を借用して「機械状存立性」を練り上げたことを明確に述べている。また、「存立性」概念は70年代初頭に形成され、その下位区分として「数学的存立性」と「機械状存立性」が導入されていることが、1971-72年にかけて執筆された「存立平面」という草稿のなかで把握できる。1972年の「存立平面」と題された草稿および、『分子革命』では以下のように、「数学的存立性」と「機械状存立性」を区別している。

①数学的存立性は公理系が無矛盾であるという事実のうちにある。

②機械状存立性は、それが多様体を全体包摂的なひとつの

記号的集合に多様体を適用するという二元論的体系に依拠しない限りこの要件を逃れる。したがって、機械状存立性は単なる論理的矛盾を「恐れ」ない。(RM, p.314, EAŒ, p.461)

「数学的存立性」は「無矛盾である」と定義され、「機械状存立性」は「論理的矛盾を「恐れ」ない」と定義される。「草稿」の注釈に記されているように、「存立性」に関する直接的な参照は20世紀のフランスの科学認識論者、数理論理学のロベール・ブランシェの『公理系』(1955) のみである（RM, p.314, EAŒ, p.407,p.461）。本節では、まず、「数学的存立性」について検討するため、ロベール・ブランシェの『公理系』を参照する。

ロベール・ブランシェは本邦では殆どその名が知られていないが、彼の『公理系』は、フランスで1955年の初版以来、何度か再版されている。数理論理学の専門外の読者を対象とした一般書であるこの本は、公理の歴史的発展について解説している。彼は、その起源をユークリッド幾何学に置き、19世紀後半の非ユークリッド幾何学の出現を受けて、公理系が形式化され、学問としての自律性を高めていく様子を描いており、科学における公理の意義や哲学への影響についても考察している。

まず、公理についてごく簡単に説明する。公理とは、その他の命題を導出するための前提として導入される最も基礎的な定義である。一つの形式体系における議論の前提として置かれる一連の公理の集まりを公理系と呼び、無矛盾性、あるいは存立性（consistance）が公理の条件である（AX,p.48）。

公理系の内で、ある体系についての無矛盾性がもし成立しているのであれば、その体系内部で当の体系の正しさ、整合性が証明されなければならない。つまり、任意の命題に対し、それが成り立つか、成り立たないかいずれか一方であり、その中間はないという論理学の規則である「排中律」を採用している(AX,p50-51)。要するに、数学的な存立性は排中律によって律せられる。しかし、公理論的集合論の発展のなかで、数学のいかなる公理系もその内部には証明も反証も不可能な命題が含まれていることが明らかになる。

ある公理系内に、矛盾する二つの命題があるとする(4)。そのいずれもが真偽を証明できない場合、それらの命題は「決定不可能」である（Warusfel ［1966］,p257）。「決定不可能な命題」とは、ある公理の体系が与えられたときに, それらの公理に関して真でも偽でもない命題のことである。そして、公理系の内ある、数えられない集合である「連続体の濃度（la puissance du continu ）」は公理によって処理できない（Warusfel[1966],p.355）。換言すれば、算術を含む複雑な形式体系では、その体系内で証明も反証もできない命題が存在する。その場合、形式体系それ自身の存立性、無矛盾性を証明することができない。つまり、数学的体系のなかで、排中律を適応できない命題が含まれている。

ガタリの草稿「存立平面」では、「公理化され得ない」次元を「機械的な多様体」として定義しており、「機械」は諸要素を非等質的なまま総合するものとして示される。確かに、ブランシェは「連続体」について触れつつ、数学的体系の内部に「公理化され得ない」次元を指摘している(AX,88-91)。しかし、「公理化され得ない」水準が介入しようとも、無矛盾性を意味する「数学的存立性」が数学の公理化の要件を支えている。それに対するガタリの公理に関する見解は、以下の文言に表れている。

われわれが確立しようとするのは、あらゆる部分的機械体系が、ひとつの公理系のなかにまったく包摂されえない――そして、少しも表象機能をもたず、無限に脱全体化、脱領土化、脱公理化された――ある同一の存立平面のなかで調和することである。（RM,p320）

ガタリによれば、存立平面の「平面」とは、連続体(4)としての性格を表しているが、前述したようにそのそれは排中律に適用することができず、数学的な言表以前の「公理化され得ない」水準の機械の領野である（EAŒ, p.461）。そして当の「存立平面」とは社会体や技術体系などの諸相の総体が横断されることを可能にすると説明される（RM,p.325, EAŒ, p.477)。

「数学」の公理系において「公理化され得ない」という次元が見いだされるが、それは排中律に律せられる限りにおいて析出されるものであり、社会的領野への参入の契機を見出し得ない。一方で、排中律に律せられるという数学的前提を有していない「存立平面」の原則のもとで「機械状存立性」は定位される。ガタリにおける「機械の問題」は、排中律による命題の真偽ではなく、ある諸要素同士が「接続するか、しないか」であり、これが「機械状存立性」の基本的性格である（RM, p.321)。

つまり、「機械状存立性」の諸要素の多様な結合は、機械的な「存立平面」を介して行われる。言い換えれば、「存立平面」は、「機械状存立性」が多種多様に総合する条件そのものであると言える（RM, p.314, EAŒ, p.461)。よって、ガタリの視点において「数学的存立性」にまずもって欠けるもの、それは全く異なる諸要素との総合である。ブランシェの『公理系』のなかに「機械状存立性」の意味内容に関わるような議論は展開されていないが、数学における「存立性」に関する議論は確認できる。ブランシェによれば公理系の応用は数学だけでなく物理学をはじめとして、様々な領域に段階的に波及したという(AX,p84)。しかし、ブラン

シェは『公理系』のなかで物理学の公理主義的な演繹的手法が重視される傾向を認め、通時的、段階的に物理学が数学によって基礎づけられる過程を記述しているが、「数学と物理学とのあいだの相互依存的」な関係を提示していない。「機械状存立性」は、このような段階的な発展のなかには見出し得ない。次節では「機械状存立性」について検討する。

3.「機械状存立性」について

本節では、物理学者のジャン＝マルク・レヴィ＝ルブロンの議論を参照しながら、「機械状存立性」について検討する。先述したように「機械状存立性」は「論理的矛盾を「恐れ」ない」と定義されている。付言すれば、「数学的存立性」とは異なり、「存立平面」が介在する「機械状存立性」は排中律によって律せられない（EAŒ,p.462）。

ガタリは、レヴィ＝ルブロンに依拠しつつ、数学を抽象物、物理学を具体物にするような関係性によって両者を位置づける比較的一般的な見解を退けていた。ガタリはレヴィ＝ルブロンに依拠しながら、二つの矛盾する傾向を指摘する。すなわち「(1) 数学の自律化への傾向、(2) 数学と物理学との相互依存への傾向」（EAŒ,p.466-447）である。つまり、数学と物理学とのあいだには互いに区別される自律的かつ相互依存的、多産的で動的な関係が機能する。

レヴィ＝ルブロンは「ユニヴェルサリス百科事典」[(6)]の「物理学と数学」という項目の中で物理学と数学の関係について、多かれ少なかれプラトン的な解釈を明確に否定する必要があると主張している。

それは、物理学者の仕事を、物理的現象の複雑さの下で、数学的関係によって表現されたポアンカレが言うような「物事の隠された調和」的な関係を単純に解読することだと考えてしまうことになるという。バシュラールが言うような「科学史の支配的な原動力である漸進的な数学化」でもなく「生産的関係」ないし「構成的関係」が重視される。

それは、物理学者の仕事を、物理的現象の複雑さの下で、数学的関係によって表現された「物事の隠された調和」的な関係を単純に解読することだと考えてしまうことになるからである。そうではなく、逆に数学の方程式の側から物理学概念が形成され得るのであり、双方向の関係性が見出される。ガリレオの物体の実験が数学的概念である「導関数」の創出を導いた歴史的事実を鑑みれば、物理学が数学に対して一方的に依存するのではなく、数学もまた物理学に依存している。つまり、数学は公理系によって、物理学は実験によってそれぞれ自律性を保ちつつ相互依存しているのであって、数学と物理学の関係性はどちらか一方に還元されて、一つの全体として統合されるわけではない。

物理法則の数学的多義性に対応して、数学的構造の物理的多義性を喚起することで、物理的概念と数学的概念の間にあらかじめ確立された調和があるという幻想を払拭する。数学と物理とのあいだの一対一対応の関係ではなく、多対多の可塑的な関係が見出される。より詳述すれば、数学の微分方程式は物理学における力学的振動や電気的振動という物理法則を記述する（物理学における多価性（plurivalence））、逆に物理学の振り子運動は、微分方程式や変分原理によって記述される（物理学の数学的多様性（polymorphisme））。レヴィ＝ルブロンによればこの多価性の重要性を指摘した代表的論者がファインマンであり、一方で、数学多様性の重要性を特に指摘したのがポワンカレであるが、両者の立場は対立するものではなく、調停可能であると指摘する。

「科学史の支配的な原動力である漸進的な数学化」という通時的な発展ではなく「生産的関係」ないし「構成的関係」という共存的な関係が重視される。数学と物理学との関係は、数学を抽象物、物理を具体物にするような関係性によって規定されるのではない。そうではなく、数学の中には、公理化によって自律する傾向がある一方で、物理学との結びつきを求め続けるという、二重の矛盾した働きが見られる。この事態をわれわれは、「自律と相互依存の二重性」として定式化できるだろう。この機能が「機械状存立性」とガタリによって名付けられた当のものであり、排中律によって律せられるのではなく、「接続される、しないか」という原則に依拠する限り、「構成的関係」は多様な仕方で構成される。

4.ガタリにおける「存立性」

ガタリは「実体」概念を拡張する「存立性」概念を用いて、理論物理学における理論的対象の存在の証明についての主張を展開する。

> ある存在の証明において、物体と当の命題を一対一対応させる指示作用が介入して判定するのではなく、理論物理学では外在的な指示対象を持たずに理論的対象を操作できる。実際、例えば理論物理学における記号と指示対象との対置は、ある程度の妥当性を失っているように思われる。今日、ある粒子の存在に実証的な証拠を与えることはもはや要求されない。理論的記号論の総体のなかでその粒子を矛盾なく機能させることができれば十分なのである。…かつて基本的であった、時空間的測定の物理的効果によってその存在を物質化するという目標は放棄されたのである。（RM,244）

ある「粒子」が存在者足り得る原因、換言すれば経験的観測以前の理論的存在者の存在の条件は、何かに一方的に依存している階層的関係に求められるのではなく、数学と物理学とのあいだの共存的な関係に求められる。つまり、純粋数学という基礎の上で、物理学が成立している前提を固持するのではなく、理論的対象は何らかの基礎的な学知に一方的に依存していないという視点をとる。

「粒子」の実在は、数学と物理学の「自律と相互依存の二重性」、「構成的関係」によってまず根拠づけられるのであり、事後的に、科学共同体による合意、資本の投入、実験設備の設立によって観測される。これは、社会的共同体の社会的合意が先立って「粒子」の存在が措定されるのはなく、科学共同体による配備に先立って、構成的関係が理論的対象である「粒子」の存在の条件を規定しているのであり、その逆ではない。つまり、「存立平面」は権利上、社会的構成体に対して常に先立って機能する。

「科学的諸連鎖という人工物（L'artifice）は、自然界には存在しない粒子、途方もないアレンジメントを生産する」（EAŒ,p.471）とガタリはいう。ガタリが導入した「存立性」は、1960年代におけるドゥルーズの「実体」概念を基底とした存在論には見られなかった自然物に限定されない科学的な理論的対象などの人工物[7]にまでその存在論的圏域を拡大し、諸対象と社会との不可分性を描いている。「機械状存立性」によって構成された「粒子」のような人工物を介することで形而上学的な存在論から政治的領野への移行を可能とする。

存立性の導入は、実体概念を形而上学から脱化し、社会的領野のなかで存在論を再び構築するために準備されたものであり、ドゥルーズの「実体」概念が「存立平面」によって再構築された存在論が社会的圏域への移行を可能にしたことを理解することができる。

ガタリは1971年の時点で、1970年代後半頃から興隆した科学技術社会学を牽引したバリー・バーンズ『新しい科学の社会学』（1974）、ブリュノ・ラトゥール、スティル・ウルガー『ラボラトリー・ライフ』（1979）に先立って、社会体と科学的対象との不可分な関係について考察していた[8]。ガタリは晩年のインタビューで、ブリュノ・ラトゥールらの科学技術社会学に対して共感を示していたが、1971年の時点ですでにガタリのなかに科学的対象と社会体、政治権力との分かち難い相互連関を描いている（QE,p.183）。

数学的記号体系と物理学の環境、科学共同体との節合によって「素粒子」の存在の条件を形成するのは「実験的―結合的であると同時に理論的―結合的であるシステムに属している剰余価値が形成される場」にほかならない。従って、数学と物理とのあいだの「生産的関係」は「剰余価値が形成される場」と結びつけることができるだろう。そして理論物理学の領域で喚起した例は、ほかの社会的領野等において展開可能であるという。

剰余価値の例として何度も繰り返し挙げられるのは蘭と雀蜂の結合関係である（EAŒ,470）。これは、植物と動物の共生あるいは共進化のひとつの例であり、蘭が自身の生殖活動にオスの雀蜂の生殖行動を利用し、蘭と雀蜂は、互いの機械的プロセスに自分自身を挿入することで、その相互作用の複合的な効果が、遺伝的にプログラムされたものでも、どちらかの種の記号的なコードに還元できるものでもなくなる。スズメバチは蘭を別のスズメバチだと信じて出会いから何も得られないが、蘭は受粉によって自己再生産性を行っている。それゆえ、蘭と蜂はそれぞれ結合関係を交わしつつ、自律性を保っている。

雀蜂と蘭はそれぞれ固有の領土(テリトリー）に属しているが、この異種間の出会いは固定的なテリトリーから逸脱すると同時に新しい関係を確立する契機になる。花粉の生殖質の流れから剰余を取り出すだけではなはなく、蘭と雀蜂のあいだで、既存の集合に還元できない「数えられない集合」が形成され、当然数学的な公理系とは峻別される（横断変換的記号の）「特異な公理系」が新たにつくられる。この「特異な公理系」とは、当然のことながら「数学的存立性」によって成立する類のものではく、「機械状存立性」によって成立するものである。

「機械にとっての問題は接続されるか、しないか」（RM, p.321）という「機械状存立性」の問題は「公理化され得ない」場であると同時に「機械」的で「生産的」な場である存立平面から、「機械状存立性」の性格を持つ生産物を産み出すことである。それゆえ、問題はいかにして異質な諸要素を統合せずに総合するような「自律と依存の二重性」を形成するかということに帰する。そして、ガタリが「理論物理学の領域で喚起した例は、社会的、芸術的等々の他の諸領域において展開することができるだろう」（RM, p.244）と言及するように、「存立性の獲得」の問題はより広く展開される[9]。

結論

本論では、従来の研究では深く論究されなかった「存立性」概念について検討した。まず、「数学的存立性」について検討したが、「数学的存立性」は排中律によって律せられる一方で、「機械状存立性」は排中律に律せられない点において両者のあいだの本性の差異がある。

ガタリはレヴィ＝ルブロンの議論から、数学的な公理系と物理学という本来異質な領域を繋ぎ、公理化の条件である無矛盾性を意味する「数学的存立性」と峻別される、諸要素を節合する「機

械状存立性」および「存立平面」を析出したと解した。レヴィ＝ルブロンは社会体の諸領域を横断する存在論的側面と社会的側面を提示している訳ではないが、ガタリはその数学と物理学の複合化に伴うその両側面を前面化する。

「機械状存立性」と「存立平面」が上記の議論から着想を得たことは間違いないのだが、ガタリは科学哲学、あるいは数学の哲学の推進を試みた訳ではない。重要なのは、理論物理学の例から、一つの全体として統合されることのない「生産的関係」ないし「構成的関係」、別言すれば、社会的な諸層の総体を横断しつつ多種多様に「機械状存立性」を生産する場である「存立平面」を描出したという点にある。「存立平面」はそうした共存的な結合関係を構成する場なのであり、「関係を欠いた」諸要素の総合は、階層性を払いのけると同時に、社会的構成体に対して現実的に働きかける契機となる(11)。

注

(1) また、いかにして「社会的、心的なものの形成を取り纏める最小限の一貫性」が保たれているのか十分に明らかにされていないほか、その最小限の安定性が粒子などの理論的対象物が数学的構造（具体的には代数幾何学）に決定的に依存しているというルネ・トムの「構造的安定性」という概念に相当するものとして提示している(Watoson, 2009, p.64)。「存立性」が物理法則のなかに数学的な構造を見出そうとする「構造的安定性」という概念に相当するという主張は、本論の立場とは異にする。

(2) ガタリとの協働を経て、ドゥルーズが論考「スピノザと私たち」（1981）のなかで、スピノザの「実体」概念に代わって、「存立平面」を導入していることが確認できる。そのなかで、スピノザの「唯一実体の肯定」ではなく、「存立平面」（「スピノザと私たち」において「内在平面」と「存立平面」は等価である）に視点を移していることがわかる（SPP,p.271）。また『千のプラトー』（1980）等においても、スピノザの「実体」が、存立平面（およびその個体化の原理である「器官なき身体」）の導入によって再考されていることが確認できる（MP,p.191 ）。

(3) ガタリ単独の仕事には触れていないものの、「内在」に関連する思想史的検討と関連づけつつ、ドゥルーズの「実体」概念および「存立平面」概念の変遷を追跡する意義深い研究（近藤［2020］）を参照されたい。

(4) ガタリは「決定不可能な命題」と「連続性の濃度」について、Warusfel[1966]の数学用語を参照している。

(5) puissance du continuum という用語の puissance は日常的な意味での「力」などのほかに、数学では「べき乗（累乗）exponentiation」の意味と集合論での「濃度 cardinalité」の意味で用いられる。ブランシェは次のように述べる。「無限の集合では、最も小さい濃度は、数えられる集合（自然数の無限級数）の濃度であり、連続体の濃度［la puissance du continu］（例えば、線上の点や実数の集合）は、数えられる集合の濃度よりも大きいということ、そして最後に、どのような集合であっても、濃度がどのような集合よりも大きい集合は、常に構築することができることを思い出してください」（Blanché,[1955],p.88,n.1)。

(6) Lévy-Leblond, Jean-Marc[1989].

(7) 山森（2018）は、『アンチ・オイディプス』第二章の修正箇所を伝える手紙のなかで、ガタリがドゥルーズに対して artifice および artificiel の用法を捉え直すように促している手紙に着目しており、ドゥルーズとガタリの両者の自然観の差異に着目している。

(8) Lecourt[2001]p.124を参照されたい。

(9) ガタリがたびたび例示する異種間交配について、蘭と雀蜂はそれぞれ固有の領土(テリトリー）、種の系統(filiation)に内属しているが、蘭が視覚的な類似性を頼りに雀蜂の形態を模倣しつつ擬態化することにより、相手を引き寄せ、花粉の生殖質の流れから剰余を取り出すという。次いで異種交配による共進化的な関係に入り、全く「関係を欠いた」系統同士の交差が形成される（EAŒ, p.337-338）。蘭は生殖行為の為に雀蜂に利用し、他方の雀蜂は擬態化した蘭との倒錯的な享楽を得ており、全く異なる系統の総合が行われる。この「関係を欠いた」共存的な結合を封鎖してしまう歴史的な通時性を保つ権力的構成体をガタリは政治的問題として提起している。

(10) 主にラカンの精神分析から引き継いだ欲望という主題において、欲望は存立性を喪失させるものとして説明され、別の本性の存立性を定立させる契機として提示される。草稿版の「存立平面」に記されるように、諸構造の公理系とは異なる「欲望の公理系は非共立性の原則を含んでいる」といい、欲望は存立性を喪失させるものであると同時に社会変革の契機を含んでいるという(EAŒ p.407)。存立は恒常的なものではなく、つねに欲望による喪失の契機を含んでいる。その存立性の結合と喪失によって、別の本性の法則を打ち立てるような「機械状のものにおける永劫回帰」（EAŒ, p.321）という差異化の回帰がなされる。

(11) 1966年に、アルチュールの門下を中心にエピステモロジー・サークルが結成され、『分析手帖』が刊行される。第一号の特集「真理」には、ラカンが「科学と真理」を寄稿し、フレーゲの数理論理学を精神分析の立場から扱ったラカン派のミレールの「縫合」論文が掲載され、アルチュセールは縫合概念を彼の政治的思想に取りいれている。そして、精神分析と数理論理学を合流させる60-70年代の構造主義の言説に対抗するべく、ラカンらとの緊張関係の中、ガタリも同様に精神分析と数理論理学と結びつけ、独自に「存立性」概念を練り上げたと考えることは可能だろう。

文献表

一次文献

略号表

[RM]: Félix Guattari, 1977, *La révolution moléculaire*, Paris, Encres.

[MR]: Félix Guattari, 1984, *Molecular Revolution: Psychiatry and Politics*. Trans. Rosemary Sheed, David Cooper, London, Penguin.

[CS]: Félix Guattari, 1989,*Cartographies schizoanalytiques*, Paris, Galilée.

[Ch]: Félix Guattari, 1992, *Chaosmose*, Paris, Galilée.

[EAŒ]: Félix Guattari, 2004, *Écrits pour L'Anti-Œdipe*(publication posthume. textes présentés et agencés par Stéphane Nadaud), Paris, Lignes.

[QE]: Félix Guattari, 2013, *Qu'est-ce que l'écosophie ?*, 1985-1992 (posthume, recueil d'articles agencés par Stéphane Nadaud), Paris, Lignes.

[MP]: Gilles Deleuze et Félix Guattari, 1980, *Mille Plateaux : Capitalisme et schizophrenie 2*, Paris, Les Éditions de Minuit.

[QP]: Gilles Deleuze,1991, *Qu'est-ce que la philosophie ?*, en collaboration avec Félix Guattari, Paris, Les Éditions de Minuit, coll. « Critique » .

[AX]: Roberte Blanché, 1955, *L'axiomatique*, Paris, PUF.

参考文献

André Lalande,2006,*Vocaburaire technique et critique de la philosophie*, Paris, PUF.

André Warusfel, 1966, *Dictionnaire raisonné de mathématiques,* Paris, SEUIL.

Christian Kerslake, 2008, «Les machines désirantes de Félix Guattari, de Lacan à l'objet «a» de la subjectivité révolutionnaire» in Multitudes, 34, Paris, Amsterdam.

David Lapoujade,2014,*Deleuze, les mouvements aberrants*, Paris, Éditions de Minuit. [『ドゥルーズ――常軌を逸脱する運動』堀千晶訳、河出書房新社、2015 年]

Dominique Lecourt, 2001, *La Philosophie des sciences*, Paris,PUF. [『科学哲学』沢崎壮宏、竹中利彦、三宅岳史訳、白水社 2005 年]

Igor Krtolica, 2021, *Philosophie Critique et Philosophie Politique,* in ARCHIVES DE PHILOSOPHIE, Tome84, Paris, Centre

Sèvres.

Janell Watson,2009, *Guattari's Diagrammatic Thought Writing Between Lacan and Deleuze*, London, New York City, Continuum Studies in Continental Philosophy.

Lévy-Leblond,Jean-Marc,1989, "Physique: C, Physique et mathematique." In Encyclopaedia Universalis, 270-274. Paris Encyclopedia universalis.

Pierre Montebello, 2008, *Deleuze, la passion de la pensée*, Paris, J.Vrin.[邦訳『ドゥルーズ　思考のパッション』大山載吉、原一樹共訳、2018 年]

江川隆男、2014、『アンチ・モラリア』、河出書房新社

江川隆男、2019、『すべてはつねに別のものである』、河出書房新社

近藤和敬、2020、『ドゥルーズとガタリの『哲学とは何か』を精読する〈内在〉の哲学試論』、講談社

山森裕毅、2018、「artifice の哲学と〈雀蜂-蘭〉の機械状生態学――フェリックス・ガタリ『アンチ・オイディプス草稿』より」、『hyphen』第 3 号, p.5-10。

https://dglaboratory.files.wordpress.com/2018/05/e38090e8ab96e88083e38091e5b1b1e6a3aee8a395e6af85e3808cartificee381aee593b2e5ada6e381a8e38088e99b80e89c82-e898ade38089e381aee6a99fe6a2b01.pdf

（最終アクセス日：二〇二三年八月二五日）

山森裕毅、2019、「スキゾ分析の初期設定」、『ドゥルーズの 21 世紀』、河出書房新社, p183-206

執筆者紹介（あいうえお順）

伊藤　幸生　会社員
尾谷　奎輔　会社役員
瀧口　隆　　大阪大学人間科学研究科　共生の人間学研究室　博士前期課程 1 年
山森　裕毅　滴塾 第二学舎 舎長

編集委員

伊藤幸生

掲載規約

本誌は、DG-Lab の 2022 年の活動報告、メンバーによる研究報告を収めている。掲載された文章はいずれも、DG-Lab におけるミーティングで合意された規約に則り、DG-Lab に投稿され、掲載が許可されたものである。掲載の許可は、掲載への反対がないかぎりにおいて DG-Lab のメンバーの総意にもとづくものである。

hyphen no. 8

2023 年 10 月 8 日発行

編集　『hyphen』編集委員

発行　DG-Lab

https://dglaboratory.wordpress.com/